

京都府地域文化創造促進事業

2024年度 実施報告

京都府地域文化創造促進事業

2024年度 実施報告

京都府地域文化創造促進事業
2024年度 実施報告

目　次

はじめに ｜ 京都府地域文化創造促進事業について …… 2

情報発信 ｜ KYOTOHOOP …… 8

主催事業 ｜ 地域プログラム …… 10

丹後地域 …… 12
パシャパシャ丹後ーはた織りと共にある暮らし

中丹地域 …… 27
「地域とアートが呼応する」５年後のみんなに届ける人材育成講座

南丹地域 …… 36
京都山河抄〜京都丹波の光景〜

山城地域 …… 50
アスレチック型コンサート〜オーケストラと遊ぼう！〜

アウトリーチ ｜ 次世代向け派遣事業 …… 59

学校・アート・出会いプロジェクト …… 60

学校・茶の湯・出会いプロジェクト …… 65

学校・いけばな・出会いプロジェクト …… 74

おわりに …… 82

はじめに
Introduction

京都府地域文化創造促進事業について

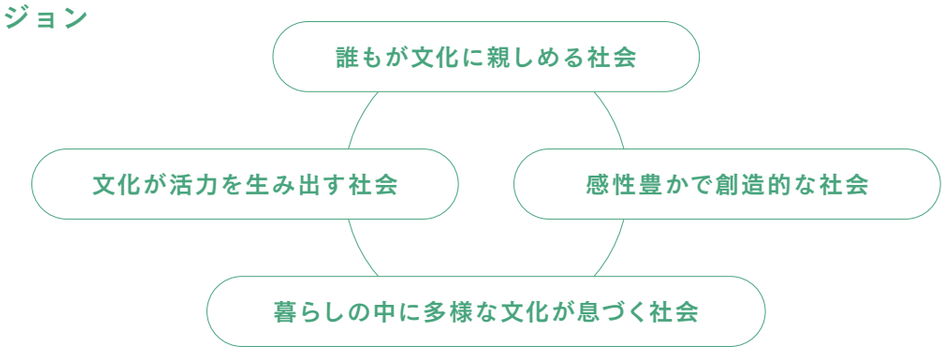
京都府地域文化創造促進事業は、南北に長い京都府において、多様な文化資源を活かした地域づくりを進めるため、文化芸術の専門人材の経験・知見を得ながら、2019年から展開している事業です。京都府域に根付く「人・場所・コト」の交流を促進し、アートの視点から地域の魅力を再発見する機会を創出するとともに、誰もが主体的に文化芸術活動に関わることができる環境づくり、そして、地域住民がそれぞれの居住地域に誇りと愛着を持ち、地域文化を大切にしながらも、新しい文化が生まれ続けるような、文化芸術の力で地域に活力を生み出す好循環を目指して、様々な事業を実施してきました。

本冊子には、６年目を迎えた2024年度の事業をまとめています。

多くの皆さまからのご助力・ご関心を得て生まれた繋がりや記録が、今後さらに「人と場所、地域と文化芸術を育む」ことにより、京都府民の皆さま自身が想い描く、温かな未来の実現への一助になることを願っています。

京都:Re-Search実行委員会
（事務局：京都府文化芸術課）

ビジョン



これまで

2019年度 京都府文化芸術課にプログラムオフィサーを1名、各広域振興局（丹後・中丹・南丹・山城）に地域アートマネージャーを1名ずつ配置し、文化芸術支援体制を強化。アーティスト・イン・レジデンス事業『京都:Re-Search』を主軸に、アートの視点から地域の魅力を再発見する取組を丹後・南丹・山城地域で展開。

2020年度 コロナ禍への対応として、専門人材を中心に、文化芸術関係者への相談支援を実施。また、アーティスト・イン・レジデンス事業『京都:Re-Search』を丹後・南丹・山城地域で実施するとともに、地域の実情を踏まえた人材育成事業を４地域で開催。

2021年度 前年度の取組の検証を踏まえ、地域における文化芸術活動支援を進めるとともに、次世代向けのアウトリーチ事業を展開。文化芸術課に新たにプログラムコーディネーターを1名配置し、府域の文化芸術情報の一体的な情報発信を促進するとともに、アーティスト・イン・レジデンス事業『京都:Re-Search』を丹後・南丹・山城地域で継続実施。

2022年度 前年度の取組の事業検証を踏まえた地域における文化芸術活動支援を進めるとともに、専門人材による調査・コーディネートの成果を可視化するウェブサイト「KYOTOHOOP」を新たに開設。地域の魅力を再発見するアーティスト・イン・レジデンス事業『京都:Re-Search』を丹後・中丹地域で実施するほか、地域の文化芸術を促進させるモデル事業を４地域で開催。

2023年度 地域アートマネージャーをはじめとする京都府の専門人材と自治体・地域住民が協働し、文化芸術の担い手の育成を目的とする事業や、文化芸術鑑賞・体験機会の創出を目的とした7つの事業を実施。また、地域アートマネージャーによる文化芸術活動支援、ウェブサイト「KYOTOHOOP」での情報発信を継続実施。

2024年度について

昨年度に引き続き、府民の意欲的な取組が地域に根づき、将来にわたって持続的に推進されるよう、「地域の能動性を引き出す」ことに留意しながら、地域における文化芸術の鑑賞・体験機会の創出を図る事業を展開しました。京都府の専門人材が中心となって企画する「地域プログラム」では、市町村や地域の文化団体・関係者等にも積極的な参画を促し、実施にあたっては、住民自らが地域の魅力を自らの感性で切り取り、自らの手で表現活動を行う要素を組み込む等、住民の能動性を引き出すことに留意しました。また、地域外からアーティストを招聘するだけでなく、地域在住のクリエイターにも企画内で活躍する機会を提供することで、住民とクリエイターの日常的な交流が生まれる仕掛けづくりも行いました。
次世代を担う子どもたちを対象にした次世代向け派遣事業では、表現や技法の体験にとどまらず、文化芸術が育んできた「こころ」を伝えることに留意し、事業を展開しました。

事業体制

文化の力を活かした地域の活性化のため、京都府文化芸術課に、事業統括・企画立案や情報発信を行う2名の専門人材を配置するとともに、府内地域における文化芸術活動をサポートし、かつ地域住民の自主的な文化活動への指導・助言のできる専門性を備えた人材を地域アートマネージャーとして各広域振興局（丹後・中丹・南丹・山城）に1名ずつ配置。
専門人材が核となり、京都府と市町村等で構成された「京都:Re-Search実行委員会」等の団体や地域発のプロジェクトを通じて、文化芸術活動による個性豊かな地域づくりを推進しています。

京都府専門人材

文化芸術課 ｜ 2名（プログラムオフィサー／プログラムコーディネーター）
各広域振興局 企画・連携推進課 ｜ 各1名（地域アートマネージャー）

地域アートマネージャー

地域アートマネージャーとは、文化芸術活動に関する知見及び文化芸術活動のコーディネート、マネジメント等の実務経験を有する専門人材です。各広域振興局に常駐し、府民や市町村等の要望に応じた支援を行う中で、地域における文化芸術活動の実情を調査・把握しています。主な担当業務は以下の3つです。

1. 地域における府民の文化芸術鑑賞・体験機会を創出するため、各広域振興局の事業と連動し、地域の実情に応じたモデル事業を企画、運営する業務
2. 地域文化振興に関わる「人・場所・コト」の実態把握、情報発信
3. 地域における文化芸術振興に関する府民等に対する指導・助言

地域アートマネージャーの各担当区域



地域アートマネージャーのプロフィール



丹後地域担当　甲斐少夜子　かい・さよこ

インドネシア、カナダでの滞在、自動車輸出の営業職などを経験後、スウェーデンで織物に出会い工芸・アートの世界へ。フィンランドでのテキスタイル留学時に、山口市&ロヴァニエミ市観光パートナーシップ協定締結記念展示会のキュレーターを務める。2019年5月に京都府地域アートマネージャーに着任。京丹後市へ移住。多種多様な経験から自然に培ったコミュニケーション能力で、アーティスト・イン・レジデンス事業、丹後地域の織物文化資源を活用した事業を担当。文化芸術が暮らしと共にあるよう、地域に寄り添った支援を行っている。



中丹地域担当　坂本真由美　さかもと・まゆみ

大学で芸術学を専攻、美学や美術史、絵画、現代アートについて学び、学芸員資格を取得。その後、国立民族学博物館での勤務を経て“つくること”への関心が高まり、大阪市立美術館美術研究所で再度デッサン、実技について学ぶ。デザインの専門学校に通いながらクリエイターの道へ。ホテルやメーカーでのデザイン職を経験し、2015年に舞鶴市へUターン。ローカルチームの活動に関わる中で、フリーランスのデザイナーとして独立。2024年12月より現職。デザイナー業を続けながら、中丹地域における文化芸術活動の支援を行っている。



@_naography

南丹地域担当　杉愛　すぎ・あい

大学生活を過ごした島根県松江市で伝統工芸や伝統芸能、芸術を通して心豊かな時間をつくる大人たちに出会い、文化芸術振興に携わることを志す。2013年より（公財）北海道文化財団で道内179市町村を対象とした助成事業やアーティストとともに地域へ公演を届けるアウトリーチ事業を担当。2017年より福岡県大野城市の多目的複合施設“大野城まどかぴあ”にて多様なジャンルの公演・ワークショップ等の制作・運営・広報を行う。2023年7月より京都府地域アートマネージャーとして南丹地域を担当する。



山城地域担当　西尾晶子　にしお・あきこ

大学でアートマネジメントを学び、いったん百貨店に就職。その後、音楽プロモーターでクラシックやジャズなど多彩なジャンルのミュージシャンたちの公演制作や広報、営業、チケット業務などを幅広く経験。2013年より、大阪府豊中市に本拠地を置く日本センチュリー交響楽団で公演制作、アーティストマネジメント、広報・マーケティングの仕事に携わる。2021年8月より京都府地域アートマネージャーとして山城地域を担当する。





相談対応・伴走支援

京都府域での文化芸術活動について、地域アートマネージャーが情報提供等の助言や支援を行っています。また、地域発の長期の取組には、持続的な運営基盤を固められるよう伴走支援も行っています。

Pickup

相談対応｜南丹地域

大型彫刻作品の屋外展示

屋外での大型彫刻作品の展示を計画していた南丹市在住の美術家・杉山雅之氏から、展示会場と広報について相談がありました。杉山氏へのヒアリングを行ったあと、会場の候補地を複数提案し、2024年度末で閉鎖される南丹市日吉地区にある廃校を活用した「森の学舎　五ヶ荘（南丹市地域活性化センター）」とのマッチングが実現。また、展示告知とコラボレーション企画の募集をウェブサイト「KYOTOHOOP」に掲載するなど、広報支援も行いました。





伴走支援｜丹後地域

丹後で福祉とアートをつなぐ実行委員会

３年目を迎えた福祉とアートを融合させた展覧会『TANGOまるっぽ美術館』に取り組む「丹後で福祉とアートをつなぐ実行委員会」には、立ち上げ時から継続して、作品選定や展示設営・運営への助言など、包括的な伴走支援を行っています。
2024年度の展覧会は“暮らしにアートを”をテーマに開催され、丹後地域にある福祉法人のアーティストの作品が７会場で披露されました。地域住民が多く来場し、丹後地域での福祉とアートの交流から生まれた取組が地域に根ざし始めています。

情報発信

KYOTOHOOP

京都府域の人と場所、文化芸術と地域の輪を育む情報サイトです。府域で活動する人や施設などを地図上に記録していくことで、人と人、場所と人などが繋がり新しいコトが起こる、文化芸術と地域が自発的に繋がる有機的な文化芸術のネットワークを【KYOTOHOOP（きょうとふーぷ）】と名付け、可視化し、育むことを目的に運営しています。人や場所の紹介以外にも、新しいコトを起こすきっかけとなるよう、各地域で展開されるプロジェクトの情報や、府内の文化芸術活動を深める記事なども更新中です。

ウェブサイト

WEB
https://kyotohoop.jp/

Instagram
@kyotohoop

Facebook ｜ @kyotohoop
YouTube ｜ @kyotohoop

KYOTO HOOP

① KYOTOHOOPに
アクセスする。

② 身近な地域の創造的な人・場所・コトを
発見する。

③ 人に会いに行ったり、場所を訪れてみたり、コトに参加したり、KYOTOHOOPに
参加する。

④ 参加した様子をSNS等でハッシュタグ#KYOTOHOOPをつけて
発信する。

⑤ KYOTOHOOPで出会った人や場所、コトをつなげて、
新しいコトを起こす。

KYOTOHOOPに掲載される。

情報共有のお願い SNS

KYOTOHOOPでは、府民の皆さまからの文化芸術の発見を募集しています。Instagram等のSNSで、ハッシュタグ「#kyotohoop」または「#きょうとふーぷ」をつけて、京都府域で見つけた文化芸術を感じる人や場所、体験などを共有してください。

Instagram
@kyotohoop

京都府文化芸術関係者支援相談窓口 SUPPORT

京都府域（京都市を除く）での活動に対するご相談をメールフォームまたは電話で受け付けています。お気軽にお問い合わせください。

▶ メールフォーム　https://kyotohoop.jp/support/

▶ 電話　075-414-5549　平日 9:00～11:30、13:30～17:00

▶ 対象　京都市を除く、京都府域で活動を行う、または活動を検討している文化芸術関係者の皆さま
（例：アーティスト、実演家、俳優、制作者、デザイナー、技術スタッフ、アートマネージャー、スペース運営者 等）

KYOTO HOOP
京都府からのお知らせ

support
メールフォーム

地域プログラム

Program

「地域プログラム」では、府域における文化活動の振興を図ることや、文化・芸術活動の担い手を育成するための取組として、各地域の実情を把握した上で企画された４つの事業を実施しました。

実施市町村

丹後地域

パシャパシャ丹後ーはた織りと共にある暮らし

宮津市・京丹後市・伊根町・与謝野町



中丹地域

「地域とアートが呼応する」５年後のみんなに届ける人材育成講座

舞鶴市

南丹地域

京都山河抄～京都丹波の光景～

南丹市

山城地域

アスレチック型コンサート ～オーケストラと遊ぼう！～

京田辺市・木津川市・精華町

丹後地域

京都府最北部に位置する丹後地域は、天橋立、伊根湾、経ヶ岬、夕日ヶ浦等、人々を魅了する自然景観に恵まれています。丹後の気候・風土が育む自然や食に関わる農林水産業や観光業に加え、織物・機械金属業等ものづくりの伝統・技術が息づいています。古代には「丹後王国」として独自の繁栄をしていたとも言われ、浦島太郎や徐福等、数多くの伝説や民話が存在するほか、重要伝統的建造物群保存地区の「伊根浦舟屋群」や日本遺産『丹後ちりめん回廊』があり、歴史・文化のロマンがあふれる地域です。



地域プログラム ｜ 丹後 ｜ 丹後地域全域

Kaicoー参加型アートプロジェクト

パシャパシャ丹後

ー はた織りと共にある暮らし

2024年度の丹後地域プログラムでは昨年度に引き続き、日本遺産『300年を紡ぐ絹が織り成す丹後ちりめん回廊』への理解を深めるKaicoー参加型アートプロジェクトを展開しました。地域特有の価値や魅力を、カメラや写真を通じて発見・発信する取組として開催した本プログラム『パシャパシャ丹後ーはた織りと共にある暮らし』は〈写真ワークショップ〉と〈展覧会〉で構成され、ちりめん街道をはじめとする機屋のある暮らし、そしてそれらを育んだ地域の特徴的な景観に着目して、丹後地域の２市２町を舞台に取り組みました。

期間 ｜ 2024年８月17日（土）～12月３日（火）
会場 ｜ 丹後地域各所
参加・観覧 ｜ 無料
参加者・来場者数 ｜ 計18,697名

主催 ｜ 京都:Re-Search 実行委員会
（京都府、宮津市、京丹後市、伊根町、与謝野町、海の京都 DMOほか）

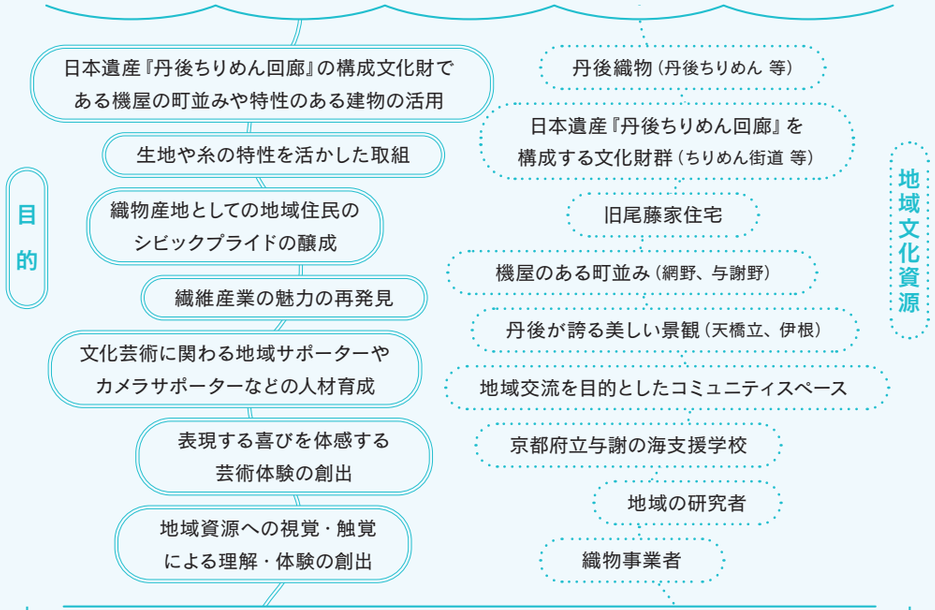
織物レクチャー講師 ｜ 小山元孝（福知山公立大学教授）／臼井勇人（臼井織物株式会社）／森山道子（手づくり紙芝居）
カメラレクチャー講師 ｜ 吉田亮人（写真家）／堂前佳穂（KYOTOGRAPHIE キッズプログラムマネージャー）

機材協力 ｜ キヤノンマーケティングジャパン株式会社
協力 ｜ 浅茂川区民会館／篠春織物株式会社／有限会社丸栄織物工場／田勇機業株式会社／京都府立丹後郷土資料館／旧加悦町役場庁舎／ちりめん街道機織り実演所／旧吉岡牛乳店（ちちや）／ NPO法人加悦鐵道保存会／京都府立与謝の海支援学校／旧尾藤家住宅／天橋立観光協会／丹後海陸交通株式会社／伊根町観光協会／伊根浦発信館おちゃやのかか（民俗資料館）／ら・ぼーと／ WILLER TRAINS株式会社（京都丹後鉄道）／ NPO法人気張る！ふるさと丹後町／ MUZ ART PRODUCE
展示デザイン ｜ miso／株式会社オーデザインチャンネルズ
展示制作（丹後ちりめんプリント） ｜ たてつなぎ
カメラサポーター・記録撮影© ｜ 安田哲馬　　運営サポーター ｜ 崎川真璃絵
まち歩きガイド・サポーター ｜ 青木順一　　地域サポーター ｜ 森田祐乃子／田中槙太朗／稲本朱珠

コンセプト

Kaico（蚕・懐古・回顧・邂逅）× 写真表現

丹後地域において、蚕から生成される資源を大切にしてきたことを、懐かしく思い（懐古）、振り返り見る（回顧）ことで、思いがけない出会い（邂逅）を創造する文化活動を【Kaico】と名付け、地域文化資源である「織物文化」を活用した、地域の魅力と住民の出会い直しを行う参加型テキスタイルアートプロジェクト。



実施場所①　**丹後地域４市町**（宮津市、京丹後市、伊根町、与謝野町）

日本遺産『丹後ちりめん回廊』を構成する文化財を有するほか、近年、アーティストやクリエイターの移住、Uターンする若者世代が主導するイベント開催や事業の活性化が多数みられ、活気が感じられる。

実施場所②　**旧尾藤家住宅**（国指定重要文化財）

江戸時代末期に建築された丹後ちりめんの商家。大型農家を基礎としつつ和洋の要素をふんだんに取り入れ、昭和初期の洋風住宅建築のほか7つの蔵を有する。住宅で所蔵する文書や絵画、生活用品などの貴重資料は定期的に展示･紹介されている。2024年1月、国の重要文化財の指定を受ける。本プログラムでは、写真ワークショップで撮影に立ち寄ったほか、展覧会のメイン会場として写真作品を展示した。

会場･環境

運営体制

主催・企画・広報
- 京都:Re-Search実行委員会（丹後部会）
- 京都府（文化芸術課／丹後広域振興局企画･連携推進課／京都府立丹後郷土資料館）
- 宮津市（企画課）
- 京丹後市教育委員会（生涯学習課）
- 与謝野町（産業観光課）
- 伊根町（企画観光課）
- 海の京都DMO

講師



カメラレクチャー講師
試し撮り・撮影実習
（バシャバシャリーダー）

吉田亮人

よしだ・あきひと

写真家。1980年宮崎県生まれ。京都市在住。滋賀大学教育学部卒業。広告や雑誌などを中心に活動しながら、個人的な出来事や問題、記憶から出発した作品を多数制作。2023年写真集出版社「Three Books」設立、共同代表。第47回木村伊兵衛賞2023最終候補、日経ナショナルジオグラフィック写真賞 2015・ピープル部門最優秀賞など受賞やノミネート多数。



織物レクチャー講師
丹後の織物の歴史について
（織物文化の監修）

小山元孝

こやま・もとたか

福知山公立大学教授。京丹後市出身。地元自治体職員として、主に教育委員会で文化財保護や自治体史の編纂を担当。2022年兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科博士後期課程修了。同年４月より現職。地域の宗教史や歴史資料について研究をしているほか、学生とともにまち歩きイベントを企画するなど歴史を活かしたまちづくりを実践している。



カメラレクチャー講師
写真の見方・撮り方について

堂前佳穂　どうまえ・かほ

KYOTOGRAPHIEキッズプログラム
マネージャー



織物レクチャー講師
丹後ちりめん精練実験

臼井勇人　うすい・はやと

臼井織物株式会社 織り手／
たてつなぎ&Cijimu織物担当



織物レクチャー講師
丹後ちりめん紙芝居

森山道子　もりやま・みちこ

手作り紙芝居

写真ワークショップ

「パシャパシャ丹後ー
はた織りと共にある暮らしを覗く」

奈良時代にあしぎぬを献上したことからはじまる丹後の織物の歴史や丹後ちりめんについて学び、“地域を育んだ織物文化と暮らし”を一緒に探る写真ワークショップを開催。丹後ちりめんとはどんな生地なのかを実験形式で体感し、丹後地域の織物文化の歴史を聞き、世界で活動する写真家等から本格的なカメラの使い方を学び、パシャパシャ丹後ならではの撮影に挑戦しました。

網野の機屋の町並み－天橋立コース
2024年8月17日（土）小学生親子
18日（日）中学生以上一般

ちりめん街道－伊根の町並みコース
2024年9月7日（土）中学生以上一般
時間 ｜ 各日10:00～17:00
参加 ｜ 無料・申込制
参加者数 ｜ 計55名（定員計60名）

出張写真ワークショップ
京都府立与謝の海支援学校
2024年9月17日（火）小中学部
25日（水）中学部
参加生徒数 ｜ 計41名

写真ワークショップ行程

① 織物レクチャー

▶織物文化の歴史の話



©

▶丹後ちりめん紙芝居



©

▶丹後ちりめん精練実験



② カメラレクチャー

▶写真の見方・撮り方　▶カメラの扱い方　▶試し撮り

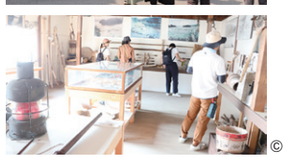


③ パシャパシャタイム　▶町を歩く　▶撮影する









©

プログラム
レポート・講評



レポート執筆
筒井章太　つつい・しょうた

1995年生まれ。北海道滝川市出身。立命館大学文学部を卒業後、広告代理店に入社。中国支社を立ち上げ20社以上の日本企業の中国進出を支援する。2022年3月FoundingBaseへ入社し、現在は京都府宮津市の「クロスワークセンター MIYAZU」を中心とした関係人口創出事業に従事。昨年度の『Kaico－参加型アートプロジェクト』では、学ぶ編への登壇およびトークイベントのファシリテーターを務めた。









レポート抜粋

8月18日
「網野の機屋の町並み－天橋立コース」

最初は遠慮がちに町を歩き、同じような写真を撮っていた参加者だが、講師の吉田氏の「もっと自由に、自分がいいなと思ったモチーフを見つけた時は思いっきり近づいたり、何度も何度も撮ってみてください」という言葉で、各々が興味を持ったポイントで立ち止まったり、地面スレスレまでしゃがんで写真を撮るなど、参加者それぞれの感性や個性が徐々に解放されていく様子が印象的だった。

現役で稼働する織物工場の中も見学することができ、織機（しょっき）が何十台も並ぶ圧巻の光景をみることができた。参加者は工場内を歩き回り、織機にギリギリまで近づいて部品の精巧さに感嘆したり、片隅に貼ってある何十年前のポスターや、長年受け継がれている作業道具などを発見し、工場の歴史の積み重ねを感じていた。カメラで写真を撮るという制限が、逆に発想や自分自身を自由にし、様々な魅力に気づくきっかけとなっているのが面白い。

また、町を歩いて視ることで、参加者は普段は見逃している風景や、隣接する建物同士の関係性にも目を向けることができているようだった。

レポート全文はこちら

9月7日
「ちりめん街道ー伊根の町並みコース」

レポート抜粋

「窓の格子の本数が違うことに気がつき、４本は機屋、というように職業ごとに格子の本数が違ったということを教えてくれた」
「ずっと伊根の舟屋に来てみたかった。今回は、船にいくつもついた傷跡を撮影したり、地元の方のお話を聞いたり、ただの観光で見つけられない、そこに住む人々の暮らしを垣間見ることができたのがよかった」
そういった、地元の参加者からの新たな発見が相次いだまち歩きとなった。
何もないと思っていた地域、当たり前の風景、毎日変わらない日常。そうやって見逃していたもの、諦めていたものも、自分の視点や捉え方によって全く違う表情を見せてくれるかもしれない。
世界は変わらずそこにあるが、解釈次第で世界と自分は変えることができるのだ。
そんなことを感じたワークショップであった。





©

レポート全文はこちら

出張写真ワークショップ ｜ 京都府立与謝の海支援学校

レポート抜粋

支援学校に通う子どもの中には、感情表現がうまくできなかったり、自分の思いを相手に伝えることが苦手だったりする子どももおり、態度や言葉からは興味や関心が判断しづらいことがある。しかし、子どもが撮る写真にはそれぞれの個性や色だけでなく、大好きな友だちがたくさん写っていたり、自分の好きなモチーフをひたすら写していたり、内に秘めた興味関心の対象が表れていた。障がいの有無に関わらず、皆で好きなものや、普段感じていることを共有して一緒に愉しむことができる、ということもカメラというツールや、写真という表現のもつ一つの可能性であると感じた。





©

レポート全文はこちら

ワークショップ参加者の声

- 元々妻が丹後出身なのでよく知ってはいたがワークを通じて地域と関わることで一層魅力的になった。（亀岡市・60代）
- 丹後ちりめんが景観・音・文化等に根付いていることがよく分かりました。また、天橋立の本来（旧来）の見方も教わり印象が変わりました。（八幡市・30代）
- はたの音で目覚めていた時期が昔あったが最近聞かなくなった。丹後ちりめんの発祥を初めてしった。（宮津市・40代）
- 網野町に17年間住んできてある程度は知っていたけど、ちりめんは縮ませる工程があることを知らなくて、勉強になった。また、網野でおすすめするなら八丁浜と思っていたけど、機織りについてもすすめていきたいなと思った。（京丹後市・〜10代）
- いろいろなしゃしんがとれてとても楽しかったしバスにものれてさい高でした。夏休みの思いでになりました。またさんかしたいです。カメラがかっこよくて初めてもって楽しかった。（京丹後市・８才）
- 身近な土地でもカメラを持つと楽しみが広がる。丹後の資源の可能性を感じました。（与謝野町・40代）
- 視点を変えてじっと物事を見る事によって新しい価値が生まれたような気がします。普段見過ごすことも今日は一度立ち止まって見る事でいつもと違ってみえました。（与謝野町・50代）
- やっぱり良い地域だなと思いました。町並みの良さや途中浅茂川で出会った機織りのお母さんなど。（京丹後市・20代）
- 地元のことでも知らないことが多かったので、ちりめんのことや織物業の歴史のことが知れて良かったです。すごい技術や職人さんがいることが分かりました。（京丹後市・40代）
- 同じ物でも見る角度、高さを変えるだけで全然違うように見えるように「丹後」という場所もいろんな見方ができるんだということに気づけました。（京丹後市・30代）
- 丹後にこんな美しい場所があると知れました。また行きたいです。（京丹後市・〜10代）
- 自分が世界を解釈し、その結果世界が変わるのを感じた。（京丹後市・30代）
- 隣の地域でも文化が大きく違うという事（福知山市・50代）
- カメラを通してみる世界はまた異なりました。非常に興味深い体験でした。（京丹後市・30代）
- 地元の魅力が深く知れた。表現の方法の重要性を再認識した。（与謝野町・30代）
- 天橋立しかしらなかった丹後地方ですが、今回のワークショップを通じてそれ以外のいろんな地域の文化に触れる事ができ、また人のやさしさにもたくさん触れられました。全然知らないからたくさん知れてよかった。丹後を好きになりました。（京都市・20代）





©

展覧会

「パシャパシャ丹後ー
はた織りと共にある暮らしを観る」

会期 ｜ 2024年11月1日（金）～ 12月3日（火）
会場 ｜ 旧尾藤家住宅ほか7ヶ所
観覧 ｜ 無料
出品者数・作品数 ｜ 95名・123点
来場者数 ｜ 計18,558名


©

写真ワークショップ参加者が、丹後地域の織物文化を学び本格的なカメラで撮影した写真作品と、講師で写真家の吉田亮人氏が丹後の織物職人を取材し被写体にしたシリーズ作品『Weave Story』を展示しました。メイン会場は2024年1月に国の重要文化財に指定された、日本遺産『ちりめん回廊』構成文化財でもある旧尾藤家住宅で、丹後ちりめん生地に写真作品をプリントした立体作品を展示しました。

展覧会のレポートはこちら

撮影場所 ｜
網野の機屋の町並み／京都府立丹後郷土資料館／
旧永島家住宅／ちりめん街道の町並み／
伊根浦発信館おちゃやのかか（民俗資料館）／
伊根の町並み／浅茂川区民会館／
旧加悦町役場庁舎／京都府立与謝の海支援学校

展示会場MAP

出品リスト

スライド動画

展示会場・展示風景

旧尾藤家住宅 与謝野町 メイン会場

＊会期中は国重要文化財指定記念として入場無料


©

京都丹後鉄道天橋立駅 宮津市 フォトスポット


©

丹海路線バス車両内 丹後地域全域

＊乗車運賃 1回150～400円


©

モニター展示会場

写真作品や写真ワークショップの様子をまとめたスライド動画を、２市町４ヶ所で上映しました。

※そのほか、京都府立丹後緑風高等学校網野学舎（京丹後市）からの提案で、校内でモニター展示を行いました。旧永島家住宅（京都府立丹後郷土資料館はリニューアル工事にむけて休館中）は、会期中、平日のみ特別開館しました。

京丹後市
ら・ぽーと（京丹後市網野庁舎）



京丹後市
浅茂川区民会館



伊根町
伊根町観光案内所


©

伊根町
伊根浦発信館おちゃやのかか
（民俗資料館）


©

展示

吉田亮人『 Weave Story 』

写真家・吉田亮人（写真ワークショップ講師）が、丹後地域の「織り」に関わって50年以上になる織物職人３組を取材し、制作した撮り下ろしシリーズ。織物職人の彼らが紡いできた人生の物語を、カメラを介してのぞき、彼らの紡ぐ言葉とともに表現した作品を展示しました。

協力 ｜
池田万里子／袖長俊男／
小森勝吉／小森明美／
向井久仁子／伊根町商工会／
吉村機業株式会社／小西鉄也

展覧会詳細はこちら







作品鑑賞ツアー

メイン会場の旧尾藤家住宅にて開催。ちりめん生地にプリントされた写真作品や、機（はた）道具を想起させる展示方法などについて、写真ワークショップでのエピソードを交えながら、住宅内を巡り、解説しました。

開催日 ｜ 2024年11月2日（土）11:00〜
23日（土・祝）11:00〜／14:00〜
24日（日）11:00〜／14:00〜
集合場所 ｜ 旧尾藤家住宅前　　所要時間 ｜ 15分程度
参加者数 ｜ 計23名（定員各回10名）



連携イベント

京丹後アートフェスティバル2024
みるプログラム連携イベント　動く美術館！

会期中、丹後地域を周遊する丹海路線バス「パシャパシャ丹後展覧会バス車両」に案内ガイドが同乗し、京丹後市内の文化スポットの解説を聞きながら、写真に切り取られた丹後の町の魅力と、車窓からの風景を同時に鑑賞しました。

開催日 ｜ 2024年11月30日（土）
集合場所 ｜ マイン前バス停
参加者数 ｜ ６名
ガイド ｜ 村上公太（京丹後市教育委員会文化財保存活用課）
運行便 ｜【往路 海岸線】10:51 マイン前発 ▶ 12:19 経ヶ岬着
【復路 丹後峰山線】14:01 経ヶ岬発 ▶ 15:20 マイン前着

※京丹後アートフェスティバル2024は、京丹後市・京丹後市教育委員会の主催事業です。





✎展覧会来場者の声

▶ 写真展を訪れることで旧尾藤家住宅も初めて訪れることができた。（与謝野町・50代）

▶ 生地に写真が鮮明に印刷されている技術におどろきました。展示の形にちりめんのモチーフ（糸巻の形とか）が使われていて愛着を抱きました。（京丹後市・30代）

▶ 織物の可能性を感じた。（京丹後市・〜10代）

▶ 行ったことがある場所、見たことがある景色でも、「人」の切り取り方によって違う魅力にうつると感じた。特に、機屋さんの「糸」の美しさ。（京丹後市・30代）

▶ 変わらないのですが、そこにある“あたりまえ”が愛しいと感じます。（与謝野町・50代）

▶ とても素敵な企画でした。まさに「はた織りと共にある暮らし」を感じることができました。大切に紡いでいかなければと思います。（京丹後市・50代）

▶ 織物に写真をプリントされていたのが現代っぽく素敵でした。（八幡市・20代）

▶ 期待以上にステキな企画でした。近くにあるものをよいカメラを通してみる、プリントされる、共有する、そして、町のアーカイブになる、多くの面でよく考えられた企画だと思いました。（福知山市・60代）

▶ 住民の皆さんが努力して町並みを残そうとされることが伝わりました。また改めてゆっくり訪れます。（八幡市・40代）

▶ いろんな会場でされることで、その場所に足を運ぶことができ、楽しいです。（京丹後市・50代）

▶ 吉田さんの写真と、写真と共に綴られていた言葉に目を奪われました。織物職人さんたちの人生や織物への想いの温度感が伝わってくる展示でした。（京丹後市・20代）

トークイベント

「パシャパシャ丹後で覗いた丹後の魅力」

写真ワークショップでカメラレクチャー講師を担当し、本展に作品を出品した写真家・吉田亮人氏と、織物レクチャー講師を担当した福知山公立大学教授の小山元孝氏の２人がプログラムを振り返りながら、丹後地域の魅力や作品について語りました。


©

開催日 ｜ 2024年11月2日（土）
時　間 ｜ 14:00 ～ 15:00
会　場 ｜ 旧尾藤家住宅内蔵

登壇者 ｜ 吉田亮人／小山元孝
ファシリテーター ｜ 筒井章太
参加者数 ｜ 14名（定員30名程度）

写真表現とまち歩きを組みあわせたワークショップが見せた地域の魅力

トークイベントレポート
筒井章太

冒頭では、ちりめん産業で栄えた丹後のまちがもともと「歩くこと」を前提に設計されていることが話題に上がった。かつての丹後は、機織り工場を中心に、店舗、食事処、旅館などが狭いエリアにぎっしりと集まり、徒歩圏内で生活が完結していた。
しかし、現代では車が移動方法の主流となり、住んでいる住民でも、一本の通りをじっくり歩いたり、日常生活の中でゆっくりとまちを歩いたりする機会が失われつつある。
本ワークショップは参加者の半数以上が地元住民であり、その中には中高生も含まれていた。彼らからは、「自分のまちは単なる田舎だと思っていたが、実は多くの宝物や歴史や文化が隠れている面白い町だと気づいた」という声が寄せられた。このように、地域に根差した魅力を再認識する機会となったことは大きな成果である、ということが口々に述べられた。
小山氏は「地元の人々が当たり前だと思っているものが、実は文化的にも歴史的にも非常に価値がある。カメラを通じてその視点を引き出せたのは大きな成果であり、私自身も丹後の町を歩くことで新たな発見が多数あった」と語った。


©

カメラが引き出す本能と創造性



次に、「参加者自身の変化」について議論が行われた。吉田氏は「一眼レフカメラという小さな四角い箱を持つという制約が、人々の感性を刺激し、参加者の視点を広げる道具になった」と述べた。
普段、目的地に向かうことを主目的とした移動が多い現代において、「過程を楽しむ」機会は少ない。しかし、私自身もこのワークショップに参加し、「面白いものを探して写真を撮る」という目的地のない体験をすることで、町そのものを面白がり、楽しめたと感じた。
特に参加した子どもたちの、本能のままに動き、地面に這いつくばるようにして写真を撮っていた様子が印象に残ったというトピックで対談は白熱。吉田氏は「彼らの写真には、純粋でありのままの本能や興味、独創的な視点が込められていた」と感嘆し、アマチュアならではの自由な発想に刺激を受けたと語った。自分の本能や感覚を大事にし、面白がりセンサーを研ぎ澄ませて生きていくことは、写真だけでなく、人生を楽しむコツにも繋がるのかもしれない。子どもたちの姿からは、そんなことを示唆してもらったように思う。

芸術表現を通じたコミュニティの形成

ワークショップのもう一つの成果は、参加者同士の新たな繋がりが生まれたことである。ほとんどが初対面だった参加者たちも、終了時にはすっかり打ち解け、トークイベントにはワークショップで出会った友人とともに訪れる人もいた。
吉田氏は「写真を通じて他者の感性や価値観に触れることで、自然と親近感が生まれたのではないか」と指摘。続けて、「同じ道を歩いても撮る写真が全然違う。写真はその人の感性や価値観を如実に映し出す。異なる視点や、逆に自分と同じ共通項に触れることで、他者への理解や興味が深まり、新たな繋がりが生まれたのだろう」と分析した。
写真という表現手段が、参加者同士の交流を深める媒体として機能したことが分かる。芸術表現そのものが交流を起こす媒体となった事例は、昨年度に地域プログラムとして実施された、丹後の町にあるさまざまな「形」を裁縫して一つの作品として共同制作するワークショップ「Kaicoー町を縫う」でも起きたことである。


©

職人の織りなす物語を遺す写真表現

後半では、吉田氏が本プログラムと並行して制作した写真作品について語られた。吉田氏は、丹後地域で長年機織りに従事する現役の織物職人３組に取材し、彼らの人生や仕事に基づいた作品を制作した。織物の仕事は、毎日同じ時間に起き、休みなく一日中、一年中機の前にいる。一見単調なルーティンワークに見えるが、その日々には職人たちの人生そのものが織り込まれている。産業の繁栄から衰退、喜びや困難、出会いと喪失など、仕事と人生が一体となり、山あり谷あり全てが織物のように積み重ねられている様子が印象的だったという。



吉田氏は「どんな小説よりも、職人たちが紡いできた人生そのものが味わい深い」と語り、取材した職人の印象に残った“言葉”を写真に忍ばせるなど、写真を通じてその魅力を表現した。

丹後の未来を紡ぐ

トークイベントの最後は、「私たちが歩いたこの丹後の町や、そこに住む人々の人生も織物のように多くの要素を織り込んで成り立っている」という話題で締めくくられた。丹後の町もまた、多くの歴史や文化を紡ぎながら今を生きている。産業の衰退、人口減少など様々な課題がある中で、この先の地域の未来をどう紡ぎ、織り込んでいくかは、今を生きる私たち次第である。
私は、地域の資源や魅力を再発見し、それを未来に繋げていく努力を続けることが、丹後の可能性を広げる鍵だと考える。「パシャパシャ丹後」は、地域内外の参加者が共に、地域の魅力を引き出し、参加者たちの感性やコミュニティを育む貴重な場となった。
芸術表現を通じ、コミュニティの交流を促進するこの取り組みがさらに多くの人々に影響を与え、丹後の未来を明るく照らす一歩となることを期待した。



©

そのほか、本プログラムの関係者等からの感想・コメントはこちら

中丹地域

京都府北部、丹波山地の山々と日本海に囲まれた中丹地域では、豊かな自然を背景とした歴史と文化が育まれてきました。良質な原料をもとに、和紙や漆の生産は古くから行われており、茶の栽培に適した由良川沿いでは品質の良い茶葉が収穫され今日の京都の文化を支えています。
古墳時代には由良川流域を中心に数千基の古墳が築かれ、平安時代には山岳寺院、鎌倉時代には綾部に国宝・光明寺二王門が建立されました。戦国時代には、福知山では明智光秀が福知山城を、舞鶴では和歌等にも通じた文化人・細川幽斎が田辺城を築き、城下町が栄えました。明治時代には、旧海軍の舞鶴鎮守府が舞鶴市に置かれ、赤れんが倉庫群は日本遺産として日本近代化の歩みを今に伝えています。



地域プログラム ｜ 中丹 ｜ 舞鶴市

「地域とアートが呼応する」５年後のみんなに届ける人材育成講座

歴史文化遺産に恵まれた舞鶴市特有のユニークな資源を、アートを介して地域の内外に深く広く普及していくことを目指して、アートマネジメント人材を育成するための講座を開催しました。講座は京都府立東舞鶴高等学校における授業の一環として、レクチャー＆ワークショップ形式で全５回を３ヶ月かけて実施しました。全５回のうち、第１回、第２回のレクチャーは一般公開とし、市民の参加も含めて、「アートって何？」という疑問から出発して考察やディスカッションを行いました。まち歩きや冊子づくりの工程を踏みながら、高校生がアートの見方や捉え方、触れ合い方、アートの可能性を探り、新しい視点で舞鶴を見つめることに取り組みました。

期間 ｜ 2024年９月19日（木）～11月14日（木）　全５日
時間 ｜ 各日9:50～11:40
会場 ｜ 京都府立東舞鶴高等学校／舞鶴市内
参加 ｜ 無料・申込制（一般公開のみ）
参加者 ｜ 京都府立東舞鶴高等学校３年生24名（未来探究コース「クリエーション芸術」選択者）／ 一般参加者12名

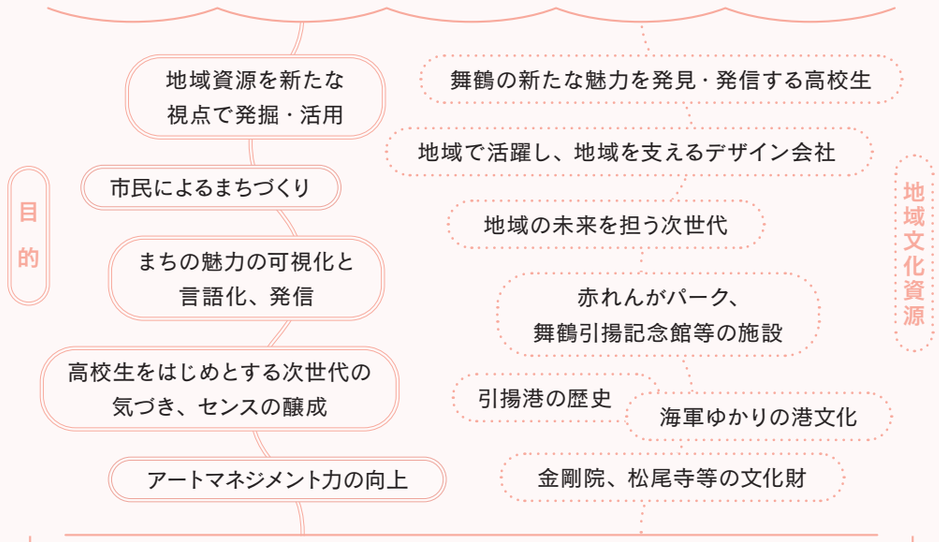
主催 ｜ 京都:Re-Search実行委員会（京都府、舞鶴市ほか）

協力 ｜ 舞鶴赤れんがパーク／舞鶴引揚記念館／金剛院／松尾寺

コンセプト

地域をアートで繋げる ×
アートマネジメント

「アートって何？」という素朴な疑問からスタート。アーティストや研究者は、日常の光景やまちをどんなまなざしで見つめているのか。自分たちが暮らすまちを新しい「目」で探る、５年後のみんなに届ける人材育成講座。



舞鶴市

赤れんが倉庫群をはじめとする近代化遺産や軍事遺産の歴史・文化資源を有し、細川藤孝（幽斎）の田辺城跡や城下町の歴史をもつ西舞鶴と、軍港都市の名残を残す東舞鶴に特徴がある。2016～17年度にアートの視点から地域の魅力を再発見するアーティスト・イン・レジデンス事業「京都:Re-Search in 舞鶴」を実施。2023年３月策定の「第２次舞鶴市文化振興基本計画」では、文化振興における市民参加やアートマネージャーの育成が重要な課題として掲げられている。

京都府立東舞鶴高等学校

国際教育及び地域に根ざした実践的な教育を推進し、持続可能な地域社会を担う人材の育成に取り組む舞鶴の公立高校。舞鶴市内の関係団体と連携し、地域資源を生かした体験的な授業を積極的に実施するなど、地域創生活動に力を入れている。

会場·環境

運営体制

主催・企画・広報
- 京都:Re-Search実行委員会（中丹部会）
- 京都府（文化芸術課／中丹広域振興局企画・連携推進課）
- 舞鶴市（文化振興課）

プログラム統括／企画制作・運営 ｜ 朴鈴子（株式会社Office PARK）

講師／アーティスト



プログラム統括

朴鈴子 ぱく・りょんじゃ

株式会社Office PARK副代表。米国にて博物館教育学修士課程修了後、2010年に京都国立近代美術館の教育普及担当に着任し学校教育における鑑賞学習支援や展覧会ごとのワークショップの企画運営を行った他、世代間交流や教科横断学習など多様なプラットフォーム形成を模索する。2015年に山口情報芸術センター［YCAM］のエデュケーターに着任して教育普及事業に取り組む。2019年独立。2021年に株式会社Office PARKを設立し、スポーツ、アートに関わる企画制作・運営を行っている。



講師［第1回・第4回］

山本麻紀子 やまもと・まきこ

アーティスト。1979年京都市生まれ。京都市立芸術大学大学院絵画専攻構想設計修了。ある特定の場所について観察や考察を続け、常識や習慣など日常の中で見過ごされている事柄や疑問を糸口にして、その場に関わる人たちとのコミュニケーションの在り方を考えるプロジェクトを行う。その一連の過程を、絵、写真、映像、染め、刺繍など様々な形式により作品制作を行っている。



講師［第2回・第3回］

石川琢也 いしかわ・たくや

研究者／エクスペリエンスデザイナー／ディレクター。京都芸術大学専任講師。UI・UXデザインの職務後、2013年に情報科学芸術大学院大学（IAMAS）に進学。2016年、山口情報芸術センター［YCAM］エデュケーターに着任し、教育・地域プログラム等の企画制作を担当。2020年より現職。音楽イベント、アート制作のディレクション、クラブカルチャーの文化史・コモンズ研究を行う。



講師［第2回］

金田研人 かねだ・けんと

合同会社VONTEN CEO。京都市内で内装設計等の仕事後、生まれ育った舞鶴市にUターン。2023年にデザイン・プロデュース会社「合同会社VONTEN」を設立。国の重要文化財「舞鶴赤れんが倉庫」内に拠点を構える。「舞鶴から世界に」をミッションに空間デザインを主軸に様々なデザインを手掛け、現在は映画の舞台美術やクリエーターによるギルド型組織の構築・ディレクション等、活動の幅を広げる。

講座プログラム

第1回 アートって何？『アート』を再定義する［一般公開］

講師 ｜ 山本麻紀子／朴鈴子

既成概念としての「アート」の定義や範囲を問い直すレクチャー。様々なメディアで作品制作する山本麻紀子氏による、表現のアウトプット法をヒントに、アートの可能性について高校生と一般参加者でディスカッションを行いました。

第2回［前半］ 地域の何が魅力になりうるのか？新しい『目』を着る［一般公開］

講師 ｜ 石川琢也／朴鈴子

社会や日常を「地域デザイン」の視点で読み解く石川琢也氏によるレクチャー。デザイン全般の歴史からデザインによる効果まで多角的に紹介し、地域を見つめるレッスンとしてワークシートを配付しました。

第2回［後半］ 冊子で何を表現できる？

講師 ｜ 金田研人／朴鈴子

本プログラムの着地点として制作する冊子づくりのための、金田研人氏によるレクチャー。読み手から制作者に立場を変えて冊子やデザインを解体。文字の書体や大きさ、レイアウト、色の配置などグラフィックデザインで情報や印象の伝わり方が変わることを学び、グループ毎に冊子制作に必要な役割分担を決めました。

第3回 まち歩きと取材

講師 ｜ 石川琢也／朴鈴子

3つのグループに分かれて、舞鶴赤れんがパーク、舞鶴引揚記念館、金剛院、松尾寺をまち歩き。取材先で石川氏、朴氏が合流してアドバイスしました。既存のガイドブックにはない視点で取材先を見つめ、新たな魅力・見どころを探りました。

第4回 表現の構築とブラッシュアップ

講師 ｜ 山本麻紀子／朴鈴子

冊子の制作に向けて、掲載する文字情報や写真を選別し、ブラッシュアップ。グラフィックデザイナーに渡す指示書に文字や写真の配置やフォント、レイアウト案など、完成イメージを詳細に書き込んでいきました。紙面の制限から、情報を細かく精査し希望と葛藤を繰り返す生徒たちに、山本氏がアドバイスしながら作業が進みました。

第5回 校正とレビュー 講師 ｜ 朴鈴子

指示書に従ってグラフィックデザインに落とし込まれた冊子の校正紙と対面。生徒たちによってまとめられた情報が冊子となって世の中に送り出される責任の重要性について朴氏が解説し、皆で校正作業を行いました。一字一句残さず確認し、誤字脱字、情報・画像の出典、見やすさなど、最後まで慎重にチェックを繰り返しました。







冊子

『よりみちまいづるー
高校生の目が切り取る舞鶴の姿』

全５回のレクチャー＆ワークショップを通して、高校生が３チームに分かれて探った舞鶴の魅力や見所を冊子にまとめました。それぞれ「色彩」「ファッション」「文化財」に着目して見つめた記事が掲載されています。
また、本冊子の発行にあわせ、本プログラムの講師や本冊子制作を担った合同会社VONTENの協力により、オリジナル・スタンプが制作・設置され、取材地をめぐるスタンプラリーが実現しました。



冊子制作 ｜ 京都府立東舞鶴高等学校３年生24名
（未来探究コース「クリエーション芸術」選択者）
取材地・スタンプラリー ｜ 舞鶴赤れんがパーク／
舞鶴引揚記念館／金剛院／松尾寺













完成冊子（PDF）はこちら

一般参加の声（公開レクチャー）

- 山本さんのお話を聞いて頭がやわらかくなりました。（舞鶴市・40代）
- 学生さんとアートについて話せて、たいへん貴重な時間でした。山本さん、朴さんのお話もおもしろかったです！（舞鶴市・40代）
- いろんな見方が、可能性があることに気づいた。（福知山市・60代）
- 個人でできることにフォーカスをあてていて希望がわいた。（舞鶴市・20代）
- まちに働きかけるヒントをいただきました。（福知山市・60代）

高校生の声

講座を受けて「舞鶴」に対する印象・見方は変わりましたか？

- じっくり見ていると、歴史のほかに建物のデザイン、色など、普段考えないような発見ができた。
- 舞鶴はあまりなんにもない場所だと思ったけれど、授業を通して身近な場所でも見方や着目点によってまだまだ知らなかったことやいろんな発見があるんだなと感じた。
- 探検する時、いつも見ない視点からいろんなことが学べた。

講座を受けて、「アート」「芸術」への印象は変わりましたか？

- 絵だけがアートではなくて、普段見えている景色もアートになりうるということ。
- 元々あるセンスが大切だと思っていたけれど、自分らしさを出すものであるという印象に変わった。
- 何かが変わることで、また違ったデザインになる面白さを知れた。
- 「アートは一人で造るもの」という偏見があったけれど、人を通してではないとアートは成り立たないんだなと思った。
- アートや芸術というのは型にはまらないものであることがわかった。また、自分の感性というのを他の人の感性に触れて理解できたような気がした。そして、感性の幅を広げられた気がした。
- アートの幅の広さは自分が思った時よりも大きくて広々としてると感じた。

講師の話を受けて、印象に残っていることは？

- アートに決まりは無いという言葉が印象に残っている。
- 景色を見る時には、ただ見るのだけでなく、色で感じること。
- 山本さんの道におちているゴミを、必要なものにしたりしていて感動した。
- 景色にある色を自分たちで想像し、今までになかった色を考えること。
- いろんなポスターを見て、文字の配置や色、フォントによってとても印象が変わることを知った。
- ほかの人と比べると景色を見る視点などが変わってくることが印象に残っている。

一般参加者を迎えた２回の講座について　朴鈴子（プログラム統括）

所感

［第１回］アートって何？「アート」を再定義する
［第２回（前半）］地域の何が魅力になりうるのか？新しい「目」を着る

現代社会において、とりわけテレビやSNSで「アート」という言葉がチープに消費される傾向がある中、「アート」を再定義することはとても重要なステップだった。わたしも、未だに簡潔にまとめられるほどの理解度に達していないが、少なくともアートは絵画や彫刻に限ったものではないし美しいとは限らない。表現の自由の観点から、人は様々な事象や感情を多様な形態で表現してきたしそれらを受容してきた。テクノロジーの発展も含めると今後さらに多様化するだろうと思う。
「アート」を再定義すると題した講座では、アーティスト・山本麻紀子さんが自身のこれまでの作品を中心に、題材となる素材との出会いから表現媒体をどう選びつくり上げていったか、実際にあった出来事と共に紹介をした。ロンドンでのプロジェクト『落とし物管理所』は、最終的に映像や（落とし物が）資料となって美術館で展示される作品となるが、題材や表現の可能性が無限であり、作品に鑑賞者を惹きつける「物語」の存在を知る重要な講座だった。
また、地域をアートで繋げるためのとっかかりとなる「地域の何をどう捉えるのか」という課題に対して、京都芸術大学専任講師の石川琢也さんが講座を担った。「デザイン」という言葉が溢れている現代社会の中で、地域をデザインすることに関しては、便利さや見た目の洗練を追求するよりも、コミュニティが持続的に取り組めることに加え、汎用性の高さが重要であるとした。オーバーツーリズムが問題視される京都では、京都府内に観光拠点が分散的に存在することが大きな手助けとなるはずだが、舞鶴市にとっても地域活性や問題解決のための緩やかなデザインの導入によって、新しい未来が描ける人材が生まれることは意義深いことだったのではないかと思う。
「地域をアートで繋げる」、２つのキーワードを深掘りすることから始まった講座は、参加した東舞鶴高校の生徒によって成果物と発展したが、一般の方々、とりわけ舞鶴在住の方々とこの時間を共有できたことで、まだ見ぬ未来に期待を寄せたいと思う。



対象 ｜ 京都府立東舞鶴高等学校３年生／一般参加者

開催日・参加者数 ｜
［第１回］2024年９月19日(木)・30名
［第２回（前半）］2024年９月26日(木)・29名

時間 ｜ ［第１回］9:50〜11:40
［第２回（前半）］9:50〜10:40

会場 ｜ 京都府立東舞鶴高等学校・多目的室









対象 ｜ 京都府立東舞鶴高等学校3年生

開催日・参加者数 ｜
［第２回（後半）］2024年９月26日（木）・24名
［第３回］2024年10月10日（木）・24名
［第４回］2024年10月24日（木）・24名
［第５回］2024年11月14日（木）・23名

時間 ｜ 各日9:50〜11:40 ※［第２回（後半）］のみ10:50〜11:40

会場 ｜［第３回］赤れんがパーク／舞鶴引揚記念館／金剛院／松尾寺
［第４回・第５回］京都府立東舞鶴高等学校・美術室

高校生の取組について　朴鈴子（プログラム統括）

所感

［第２回（後半）］冊子で何を表現できる？
［第３回］まち歩きと取材
［第４回］表現の構築とブラッシュアップ
［第５回］校正とレビュー

わたしが美術館勤務だった頃は、10代の若い世代の暮らしや居所に関心があり、彼らを対象に様々な企画を実施した。しかし近年はほとんど関わりがなかったので、今回は緊張と高揚感が入り混じる気持ちで初日を迎えた。正直なところ、壇上から見た彼らの姿からは取組への意欲は希薄に感じられた。しかし一人一人と対面で話すと、強い思いや深い思考を受け取れ、講座毎に発展する彼らのアイデアやこだわりが楽しみになった。
舞鶴の高校生の多くが、卒業後、市外への進学や就職で舞鶴からいなくなると聞いた。講座の対象者は高校３年生、まさに４月には舞鶴から飛び立つ。そんな彼らが舞鶴を見つめ直し、自分たちの文脈で「舞鶴」を公に伝えることによって、舞鶴への愛着、ひいては舞鶴に戻ってくることに繋がるのではないかと思った。そんな未来のために、地域の魅力を発掘する審美眼を持ち、多様な文脈で発信できる人材を育成することには、未知数の可能性があると思う。このような人材育成事業は即効性に欠けるかもしれないが、受講した方々の体内でじりじりと醸成されていくことに期待したい。

南丹地域

「京都丹波」とも呼ばれる、京都府中部の南丹地域は、大都市に近接し、京都市内への通勤通学者も多く、高い利便性を有しながらも、豊かな森林や田園風景に恵まれた「森の京都」の魅力が詰まった地域です。古くから京の台所を支えてきた食の宝庫でもあります。京阪神地域等へのアクセスの良さを背景に、高い技術力を有する多種多様なものづくり企業が立地し、環境やものづくり、建築、医療等様々な専門分野にわたり特色ある大学や大学校等が集積していることから、産学公連携による人材育成、食や農の分野における産業イノベーションも期待されています。



地域プログラム ｜ 南丹 ｜ 南丹市

京都山河抄
～京都丹波の光景～

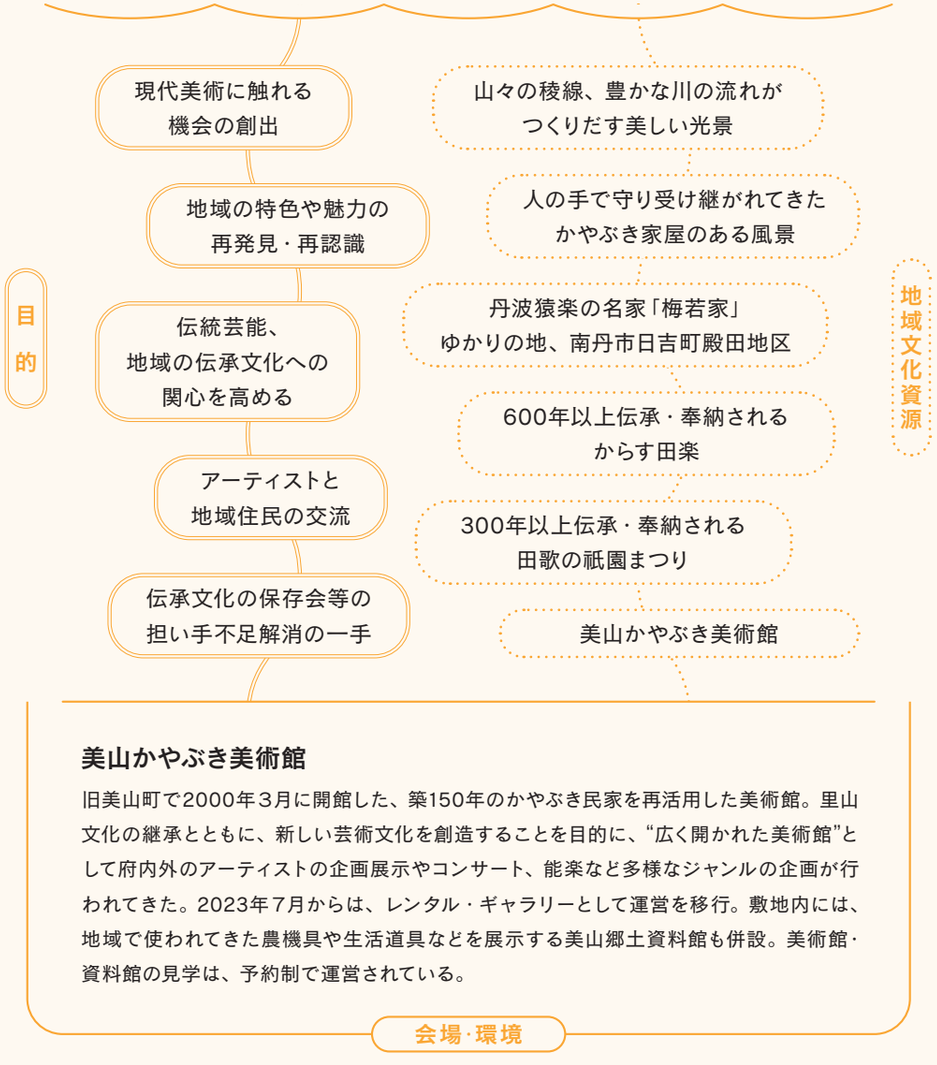
丹波猿楽などにゆかりが深い南丹地域。
その伝統芸能を育んだ地域性に着目し、現代美術家ヤマガミユキヒロ氏が約６ヶ月間、南丹市美山町や日吉町各所のリサーチを重ねながら、美山かやぶき美術館を拠点に公開制作、地域交流、そして制作発表に取り組みました。
日常で見慣れた風景の、鉛筆による描写と映像を組み合わせたヤマガミ氏独自の手法「キャンバス・プロジェクション」によって、南丹地域に広がる山々の稜線、豊かな川の流れがつくりだす美しい光景の数々が描きだされ、アーティストの目線や表現を通した地域の魅力の掘り起こしによって、地域を見つめなおしました。

期間 ｜ 2024年7月27日（土）～11月10日（日）
参加 ｜ 無料
参加者・来場者数 ｜ 計498名
主催 ｜ 京都:Re-Search実行委員会（京都府、南丹市ほか）
共催 ｜ 美山かやぶき美術館
協力 ｜ 美山町宮島振興会／樫原田楽保存会／世木の伝統芸能を守る会

コンセプト

地域で伝承されるもの × 現代美術

かやぶき家屋や田畑の風景、「田歌の祇園まつり」「からす田楽」などの京都府登録無形民俗文化財など、地域の人々の手によって受け継がれ、伝承されるものを、ヤマガミ氏独自の「キャンバス・プロジェクション」や映像、スケッチ等で制作発表しました。



美山かやぶき美術館

旧美山町で2000年3月に開館した、築150年のかやぶき民家を再活用した美術館。里山文化の継承とともに、新しい芸術文化を創造することを目的に、“広く開かれた美術館”として府内外のアーティストの企画展示やコンサート、能楽など多様なジャンルの企画が行われてきた。2023年7月からは、レンタル・ギャラリーとして運営を移行。敷地内には、地域で使われてきた農機具や生活道具などを展示する美山郷土資料館も併設。美術館・資料館の見学は、予約制で運営されている。

会場・環境

運営体制

主催・企画・広報等
- 京都:Re-Search実行委員会（南丹部会）
- 京都府（文化芸術課／南丹広域振興局企画・連携推進課）
- 南丹市（地域振興部）

共催 | 美山かやぶき美術館

アーティスト・講師



ヤマガミユキヒロ

現代美術家。1976年大阪生まれ。大阪芸術大学建築学科中退。京都精華大学美術学部洋画コース卒業。日常で見慣れた風景を鉛筆や墨などで描画した絵画に、同一視点から撮影した映像をプロジェクターによって投影する「キャンバス・プロジェクション」という絵画に光と時間を取り入れる独自の手法により作品を制作。これまで、東京駅復原工事完成記念展（東京ステーションギャラリー）をはじめ、アサヒビール大山崎山荘美術館、21_21DESIGN SIGHT、藝倉美術館（上海）、ビクトリア国立美術館（オーストラリア）など国内外での展覧会に参加。第11回岡本太郎現代芸術賞 特別賞受賞、Mio Photo Award 2000 優秀賞受賞。

実施スケジュール

5月～	南丹地域のリサーチを開始
5月	梅若家ゆかりの地を取材
7月	ぬりえワークショップ、小展示開催
8月	公開制作
9月	「田歌の祇園まつり」のヒアリング
10月	「からす田楽」を取材
10月～11月	展覧会開催
2月	ポストカード集『京都丹波十八景』発行

キャンバス・プロジェクションとは

日常で見慣れた風景を鉛筆や墨などで描画した、色や陰影のない絵画に、同一視点から撮影した映像をプロジェクターによって投影するヤマガミ氏独自の表現手法。

プログラムレポート・講評



平田剛志 ひらた・たけし

美術批評。1979年生まれ。関西の現代美術をフィールドに、新聞・雑誌やフライヤー、ウェブメディア等に寄稿。主な論考は、「山本雄教展 sign」（+1art、2024）、「記憶をひらく」『すべ と しるべ 2020図録』（ギャラリー・パルク、2021）、「バランプセストの風景」『ヤマガミユキヒロ展 ロケーション・ハンティング』（A-Lab、2016）など。

ぬりえワークショップ

「百色百景・みんなの風景 in 美山」

ヤマガミ氏による、スケッチやぬりえのワークショップを開催。参加者は、ヤマガミ氏が南丹地域の風景を描いた鉛筆画（モノクロ）を下図に、絵の具や色鉛筆で思い思いに彩り、それぞれの個性が光る作品を制作。最後には、ヤマガミ氏の風景画と参加者のぬりえ作品を重ねて投影する「キャンバス・プロジェクション」を体験。また、会場にはヤマガミ氏が描いた南丹地域のスケッチや過去の作品の数々を展示し、紹介しました。

開催日 ｜ 2024年7月27日（土）
28日（日）
時間 ｜ 各日10:30〜12:00
会場 ｜ 美山かやぶき美術館
参加 ｜ 無料・申込制
対象 ｜ どなたでも
参加者数 ｜ 計31名（定員30名）
持ち物 ｜ 鉛筆、色鉛筆、
クレヨン、水彩絵の具など
講師 ｜ ヤマガミユキヒロ
アシスタント ｜ 佐藤健博
小展示来場者数 ｜ 計56名

レポート抜粋

夏の強い日差しの中、参加者たちは朝10時頃から集まり、自分の画材を用意するなど、意気込みが感じられた。ヤマガミによる概要説明では「絵に失敗はない」と、楽しんで描くことを伝え、ぬりえが始まった。

会場には、色鉛筆やパステル、水彩、鉛筆、墨汁などの画材が用意され、参加者は好きな色を選んで塗り重ねていった。参加者の中には、久しぶりに絵を描くという方が多く、慎重に色を選んだり、塗ったり、集中して取り組んでいた。

ヤマガミは、パステルを手にした子どもたちにパステルを指で伸ばしてみることをアドバイスしたり、空を描いた絵には飛行機雲を描き加えてみることを提案するなど、参加者それぞれの様子から、さりげなく技法や構図のアドバイスをしていたのが印象的だった。

ワークショップ終了後も多くの参加者が会場に残り、追加のぬりえを制作する姿が見られた。日頃は絵を描かない参加者からは「絵なんて描いたことがなかったけれど楽しい」といった感想もあがり、ぬりえを通じて日頃は見慣れている地域を再発見する機会となった。







レポート全文はこちら

公開制作

10月開催の展覧会に向け、ヤマガミ氏の出品作品の制作過程を公開。地域住民や観光客が訪れ、アーティストの制作を間近に見ることができる貴重な機会となりました。

日時 ｜ 2024年8月17日（土）、18日（日）
各日11:00〜16:00
会場 ｜ 美山かやぶき美術館
参加 ｜ 無料　　来場者数 ｜ 計47名

レポート抜粋







レポート全文はこちら

11時、つなぎ服に着替えたヤマガミの公開制作がはじまった。縁側のある居間に立てかけられたパネルにはまだ余白が目立つが、左側に茅葺き民家、中央に川と右側に山並みが鉛筆でラフに描かれている。この風景は、リサーチの中から選ばれた下吉田の由良川が流れる集落の風景である。

パネルの左には取材地の写真を表示したノートパソコンが置かれ、ヤマガミは写真を確認しながら描き進めていく。時おりサンドペーパーの上で鉛筆を削り、木々の植栽、山並みなど鉛筆を短く動かして自然の立体感を作っていく。完成作品はキャンバスに映像が重ねられるが、制作途中ではモニターとパネル2つの画面が並び、まるで映像を絵画に変換していくようだ。

午後には、かやぶき美術館の向かいに建つ郷土資料館をスケッチしていた画家の女性たちが来場し、スケッチについて相談が行われる場面もあった。

短い公開制作だったが、来場者は築150年の茅葺き民家とヤマガミの絵画制作を熱心に見ていた。古民家と現代アートの組み合わせは多くの人を引き付ける魅力があると感じられた。また、期間中、来場者がヤマガミに美山や観光で訪れたおすすめの風景を教え合う場面が多くあった。これは風景画が鑑賞者の記憶を呼び起こす反応を示している。ヤマガミの作品は鑑賞者それぞれの風景記憶を呼び覚ます風景画なのだ。

リサーチ

期間 ｜ 5月〜10月に実施



地域をリサーチすることから始めたこのプログラムで、ヤマガミ氏が最初に向かったのは、日吉町殿田地区でした。世木の伝統芸能を守る会の案内のもと、梅若家の屋敷跡やその菩提寺である曹源寺を訪れ、聞き取りを行いました。その後、南丹地域に通う中で出会った地域の方に教えられた南丹市美山町下吉田地区の美しい山の稜線と川、かやぶき民家と田畑がある“美山ならではの風景”に魅了され、その風景を「キャンバス・プロジェクション」で描くことを決め、取材と撮影を重ねました。

また、リサーチの中で知った、美山町田歌地区で毎年7月14日に行われる五穀豊穣と子孫繁栄を願う奉納神楽「田歌の祇園まつり（地域での通称：田歌の祇園さん）」について話を聞き、さらに10月14日には、美山町樫原地区で五穀豊穣と山仕事の安全を祈願する「樫原の田楽（地域での通称：からす田楽）」の奉納の様子を取材し、南丹地域に受け継がれてきた文化や魅力をじかに探っていきました。



世木の伝統芸能を守る会を取材



美山町下吉田地区を取材



「田歌の祇園まつり」を受け継ぐ方々を取材



樫原田楽保存会を取材

レポート抜粋



からす田楽のリサーチ

日時 ｜ 2024年10月14日（月・祝）
12:00〜15:30
会場 ｜ 川上神社（大原神社摂社）
取材・撮影 ｜ ヤマガミユキヒロ
取材協力 ｜ 樫原田楽保存会
撮影補助 ｜ 佐藤健博

現代美術家のヤマガミユキヒロは、風景を描いた鉛筆画に、同じ視点から撮影した映像を投影する「キャンバス・プロジェクション」による平面作品だけでなく、能楽とのコラボレーションも長く行ってきた。2014年から観世流能楽師の林宗一郎と始めたコラボレーション・プロジェクト『noh play』である。これはヤマガミの描いた鉛筆画を背景に林宗一郎が能を舞う公演や映像を重ね合わせた作品で、全国各地で発表を重ねてきた。

そんな能楽と縁の深いヤマガミが丹波猿楽発祥の地である南丹地域で着目したのが、地域住民によって永年守り続けられてきた伝統芸能「からす田楽」である。田楽とは、田植えの際に歌や踊りを行う農耕儀礼で能楽のルーツとされる芸能である。「からす田楽」は、美山町樫原地区の大原神社境内にある地区の氏神を祀る川上神社の例祭であり、毎年10月10日（現在はスポーツの日）に山仕事の安全と稲の豊作を願って氏子により奉納される。名前の由来は、烏帽子を被った「からす役」が烏の鳴き声を真似て前方に飛び跳ねる所作に由来する。これは神の使いである烏が田を荒らす害獣を追い払う意味が込められているという。600年以上続く伝統があり、1983年には京都府の無形民俗文化財第1号にも指定されている。近年は少子高齢化に伴う後継者不足により、存続が危ぶまれてもいる。

「からす田楽」は口伝で伝承されるため、伝承される人がいないと途絶えてしまう。ヤマガミは、日本各地の多くの郷土芸能の消失が危惧されている現状を踏まえ、口伝だけでなく、自身の作品にすることで「からす田楽」の伝承に貢献できると考え、リサーチを兼ねた映像記録を行った。

過去に能とのコラボレーションを手掛けてきたヤマガミにとって、美山の自然あふれる野外で奉納される「からす田楽」は貴重な経験だっただろう。地域の風景や伝統が消えつつある今、その継承の記録がヤマガミの作品によって残されることは、伝承芸能を未来に繋げる可能性なのかもしれない。

レポート全文はこちら

リサーチ映像はこちら

展覧会

「京都山河抄～京都丹波の光景～」



ヤマガミ氏が捉えた南丹地域の風景の数々を展示。美山かやぶき美術館のゆったりとした空間を存分に使い、室内構造を活かした唯一無二の展示となりました。キャンバス・プロジェクション作品、映像作品、スケッチのほか、ぬりえワークショップ参加者の原画とヤマガミ氏との共同作品が一堂に並びました。ヤマガミ氏の目線や表現によって、地域で守り継がれる自然や伝統行事の様子や魅力を紹介したことで、来場者が京都丹波の美しい光景に新たな気づきを得る機会となりました。

会期 ｜ 2024年10月12日（土）～11月10日（日）
休館 ｜ 火・水・木曜日
開館時間 ｜ 10:00～16:00
会場 ｜ 美山かやぶき美術館
作家 ｜ ヤマガミユキヒロ
入場 ｜ 無料
来場者数 ｜ 計320名
作家在廊日 ｜ 2024年10月13日（日）、26日（土）、
11月9日（土）
共催 ｜ 美山かやぶき美術館
協力 ｜ 美山町宮島振興会／樫原田楽保存会／
世木の伝統芸能を守る会



アーティストトーク

約６ヶ月間にわたるリサーチと制作から、ヤマガミ氏が捉えた南丹地域の魅力や作品について語りました。

開催日 ｜ 2024年10月13日（日）、26日（土）
時間 ｜ 各日14:00～（各回20分程度）
会場 ｜ 美山かやぶき美術館
登壇者 ｜ ヤマガミユキヒロ
参加 ｜ 無料
参加者数 ｜ 計23名







座談会

ヤマガミ氏が南丹地域でのリサーチで出会った伝統文化の継承・振興に励む方々とともに、地域で受け継がれるものをいかに未来に繋げていくのか、“地域のこれから”を語り合う座談会を開催しました。

開催日 ｜ 2024年11月９日（土）
時間 ｜ 14:00～15:30
会場 ｜ 美山かやぶき美術館
登壇者 ｜ ヤマガミユキヒロ
青田真樹（美山町宮島振興会・美山かやぶき美術館）
山口恒一（樫原田楽保存会 代表）
井尻治（梅若家屋敷跡保存会 会長）
参加 ｜ 無料・申込制
参加者数 ｜ 21名（定員30名）

記録動画はこちら

参加者・来場者の声

ワークショップ

▶ 同じ色でも濃さをかえたら違うような色になった。（南丹市・8才）

▶ みんないいセンスがあるなぁと思った。（南丹市・10才）

▶ 美山にはずっと行ってみたいと思っていたので良い機会になりました。丁寧に筆の使い方など教えていただきありがとうございました。（京都市・40代）

▶ 何年ぶりに水彩画を描いて水がにじんだり昔はわからない楽しさがありました。ヤマガミさん佐藤さんがとてもポジティブにアドバイスしてくれて、楽しく色を入れることができました。（滋賀県・50代）

▶ 70年ぶりに色鉛筆でぬりえができました。美山の自然風景を絵にすることができ満足です。（南丹市・80代以上）

展覧会

▶ 作品と音をきいていると、自分が本当にそこに立っているようでした。色がついていくのもおもしろかったです。（大阪府・20代）

▶ かやぶきの家に入ったのは初めてだったので、驚きが多かった。（亀岡市・40代）

▶ 美山の美しい山や川、かやぶきの家などあらためていいなと感じました。皆さんの絵も個性があり様々で良いです。（南丹市・50代）

▶ 絵画に空間軸と時間軸を加え、面白い企画だと思いました。（南丹市・60代）

▶ 美山の美しさを知ることができてよかったです。今から橋のある風景を見に行きます。（千葉県・60代）

▶ 展示方法の趣向が珍しく、興味深く見せていただきました。（京都市・70代）

座談会での声

▶ 地域で（歴史や文化を）引き継いでいくために、新しいものを提供し住民の興味を促す伝承方法をやっていきたい。（井尻氏）

▶ 「からす田楽」を氏子のみで継承していたが、今年初めて（氏子ではない）関心のある方に参加してもらい、固定観念を外して新しい人を迎える大事さを感じた。（山口氏）

▶ 美山かやぶき美術館には、「つかってくれる人」が必要。利用者を増やすことが大事。そのために、運営を変えるなど工夫している。（青田氏）

▶ 例えば、美山かやぶき美術館をアートセンター化し、分散している南丹地域の様々な文化資源に触れられれば、それらに出会うきっかけになるのでは。（ヤマガミ氏）

▶ 「田歌の祇園さん」では、人数不足を補うために男児が担っていた役を女児にもしてもらっている。（南丹市・50代）

▶ 伝承と継承の100年先より10年先をどうありたいか。（南丹市・60代）

展覧会・プログラム講評

平田剛志

展覧会「京都山河抄〜京都丹波の光景〜」は、古民家のアトリエに入ったように、「制作過程」が生き生きと感じられる展示だった。
プログラムのアーティスト・講師であるヤマガミユキヒロは5月から約6ヶ月間、南丹市美山町や日吉町など南丹地域のリサーチを重ねてきた。ヤマガミが特に魅かれたのが、かやぶき屋根の古民家と美山に広がる山々の稜線、豊かな川の流れがつくる風景だった。7月のワークショップ、8月の公開制作と定期的に制作過程を公開してきたヤマガミが見た「京都丹波の光景」とはどんな風景だったのか。以下では、ヤマガミが見た美山の風景、地域がアーティストに与えた影響を振り返ってみたい。
会場には、美山を中心とした南丹地域の風景をスケッチした原画や鉛筆画に同一視点からの映像をプロジェクターで投影するヤマガミ独自の技法「キャンバス・プロジェクション」による新作など8点（組）が展示された。



《京都山河抄》
（2024年／映像作品／ 13分22秒）
本作では、田歌地区の祇園囃子や樫原地区のからす田楽の囃子の音、八木地区の田園沿いに吹く風の音など、ヤマガミが南丹地域各地を描いた際に耳にした、地域の環境音が使用されている。



《京都山河抄（下吉田大橋より由良川を望む）》（2024年／キャンバス・プロジェクション／8分21秒）

《京都山河抄（下吉田大橋より由良川を望む）》は、地域の環境音とともに南丹地域の風景が描かれる過程が「紙芝居」仕立てで移り変わる映像作品だ。黒い背景に鉛筆画が置かれると、画面の絵画は白黒から着彩画へと変化する。しばらくすると画面外からヤマガミの手が出て、一枚また一枚と絵が変わっていく。途中にはヤマガミの言葉が散文形式で差し込まれ、絵と文字を書き記す画家の手の動きとまなざしから、鑑賞者はヤマガミの南丹地域での取材と絵画制作を追体験する。

《京都山河抄（下吉田大橋より由良川を望む）》は下吉田大橋から見た由良川の風景を描いた鉛筆画に同じ視点から撮影した動画を投影する作品だ。8月17日、18日の公開制作時に制作していたのが本作である。公開制作時には描いている部分より白い部分が多かったが、完成作では山の全容が描かれるだけでなく、夏の雲や光の変化など、美山の夏の映像が重ねられている。作品の前のテーブルにはスケッチと鉛筆が広げられ、スケッチを描き終えたような気配が漂う。

《京都山河抄（梅若家 展墓）》は、日吉町殿田地区の曹源寺にある丹波猿楽の名家である梅若家の墓所に向かうまでのスケッチをまとめた映像だ。ヤマガミがこれまで能楽とのコラボレーションや公演、作品制作を重ねてきた関心から、丹波猿楽のリサーチとして行った成果である。
２階には美山郷土資料館などを描いたヤマガミの絵に7月27日、28日に開催されたワークショップ参加者が彩色した風景画が重ねられた映像《百色百景 みんなの風景 in 美山》を展示。同じ場所ながら、参加者それぞれのタッチや色彩が感じられ、風景の見え方や表現方法の多様さが感じられた。

以上、展覧会を振り返ると本展は美山の風景を現地で見る醍醐味とその絵画制作の現場を感じさせる展示だった。では、ヤマガミが南丹地域でのリサーチや公開制作を通じて表現したものとは何だろうか。それは、「原風景」を残す試みではないだろうか。これまでヤマガミが描いてきたのは東京駅や京都など都市風景や歴史的な場所、名所が多かった。対して今回は人工物がほとんどない無名の自然風景である。だが、自然の風景とは人の手が入っていない場所ではない。田畑は人間が作り続けてきた田園風景であり、美しい山稜も定期的な樹林の伐採によって管理されてきた風景である。つまり、植物があるから自然の風景なのではなく、自然の風景の背後には、風景を守り、残し、維持する人々がいるのだ。美山はそうした人と風景の繋がりが生きている地域だった。ヤマガミは今回の美山滞在で、今は失われつつある人々の暮らしと文化、風景が繋がりをもって営まれる「原風景」を見出し、描き出したのだ。


《京都山河抄 スケッチ》（2024年）
展示の様子


《京都山河抄（梅若家 展墓）》（2024年／映像作品／7分35秒）展示の様子
本作は、山の斜面の階段を上り墓所に向かうまでの道のりを描いた複数の鉛筆画が、コマ撮りのように次々に現れる映像と、梅若家にとって特別な意味を持つ演目『芦刈』の謡が流れる。


《百色百景 みんなの風景 in 美山》（2024年／映像作品／ 6分14秒）展示の様子


《京都山河抄（ひょうたん池）》（2024年／映像作品／5分40秒）展示の様子

一方、美山は過疎化や高齢化、空き家の増加によって伝統文化や風景の継承が難しい状況にある。地域の文化が途絶えることは、その風景が失われるに等しい。人々の暮らしとともにあった美山の風景はヤマガミの風景画によって残り続けるのか、再びまた訪れることができる風景としてあるだろうか。ヤマガミが南丹地域で見出した風景への思いは、風景や文化を次代に伝え残す新たな物語のはじまりかもしれない。



山城地域

京都府の南部に位置する山城地域は、京都・奈良・大阪を結ぶ歴史的文化地域です。奈良時代の平城京と平安時代の平安京の両文化の影響を受けながら発展し、『万葉集』をはじめ、『源氏物語』や『平家物語』にも縁の深い地域で、歴史的文化遺産が数多く残されています。また、暮らしや地域産業に結びついたお茶文化など、山城ならではの豊かな文化に恵まれています。けいはんな学研都市など、企業や研究施設が集まり最先端の科学技術が生み出されるエリアと、茶畑景観など日本の原風景ともいえる豊かな文化資源を持つ農山村エリアが混在する多様な地域特性を有しています。



宇治市　京田辺市　宇治田原町
城陽市　木津川市　笠置町
向日市　大山崎町　和束町
長岡京市　久御山町　精華町
八幡市　井手町　南山城村

地域プログラム ｜ 山城 ｜ 京田辺市、木津川市、精華町

アスレチック型コンサート ～オーケストラと遊ぼう！～

多数の音楽ホールによって豊かな音楽体験が提供される山城地域。今年度は、文化とサイエンス＆テクノロジーが融合したけいはんな学研都市を舞台に２つのプログラムを展開しました。音楽ホールの上質な“音”を身体で感じる「アスレチック型コンサート～オーケストラと遊ぼう！～」では、即興演奏家の片岡祐介氏をファシリテーターに迎え、けいはんな学研都市の文化の要であるけいはんなホールで、同ホールを拠点とするけいはんなフィルハーモニー管弦楽団とともに、ワクワクする“遊び”を散りばめたメインプログラムのコンサートを開催。また、サイエンスの視点で“音”の不思議に触れるサブプログラム「音のアスレチック広場」を関西光量子科学研究所（QST）で実施しました。

日程 ｜ 2024年11月16日（土）・2025年1月11日（土）
会場 ｜ 関西光量子科学研究所（QST／木津川市）
　　京都府立けいはんなホール メインホール（精華町）
参加 ｜ 無料
参加者・来場者数 ｜ 計1,575名
出演 ｜ 片岡祐介（音楽ファシリテーター）／
　　けいはんなフィルハーモニー管弦楽団（演奏）※メインプログラムのみ

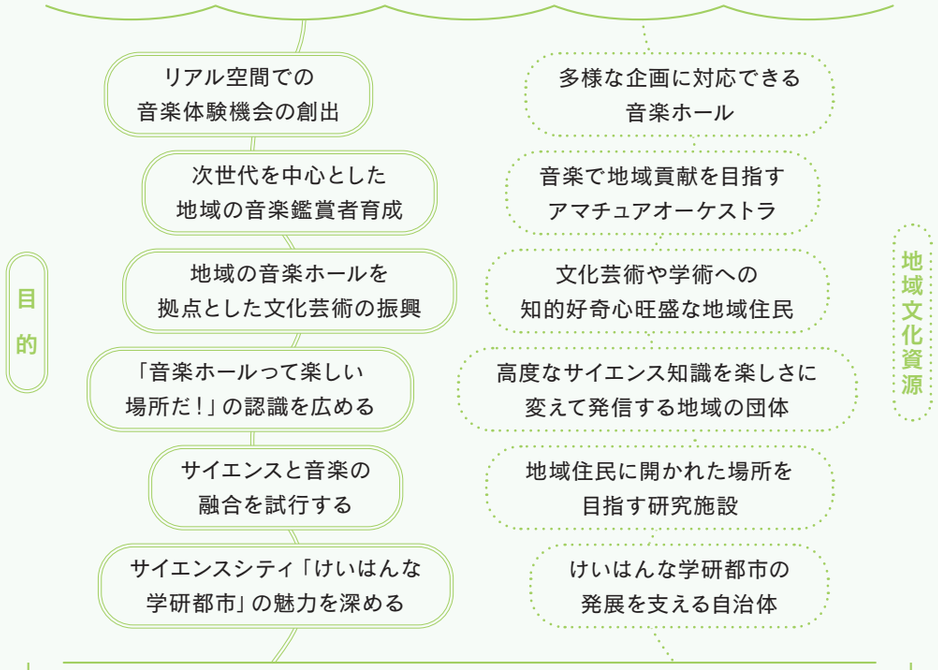
写真撮影 ｜ 大島拓也 ※メインプログラムのみ
サブプログラム協力 ｜ NASC（奈良先端科学技術大学院大学 認定課外活動団体）／
　　けいはんなジュニアロボットクラブ

主催 ｜ 京都:Re-Search実行委員会
　　（京都府、京田辺市、木津川市、精華町、株式会社けいはんな ほか）

コンセプト

けいはんな学研都市 × アスレチック

遊びを通して能動的に楽しみ方を獲得することを「アスレチック」というワードに置き換え、
けいはんな学研都市で音楽とサイエンスのアスレチック型プログラムを展開。
音楽とサイエンスの双方向の扉を開き、地域住民の関心の輪を広げる取組。



京都府立けいはんなホール

1993年開業のけいはんなホールは、1,000人収容のメインホールやイベントホール等で構成され、けいはんな学研都市の文化学術交流施設「けいはんなプラザ」の複合機能の一環として文化事業・コンベンション開催等を担う。株式会社けいはんなが管理運営を行い、ホテルや飲食店、研究機関等とも連携した総合的なサービス提供により、地域住民からベンチャー企業まで、様々な人と組織が集まる地域の中核的なホールを目指す。音楽、古典芸能、ダンス、演劇等、上質な文化芸術の鑑賞機会や体験の場を提供し、2025年には、大阪・関西万博と連携した「けいはんな万博2025」の主会場の一つとして各種文化イベントの開催を予定している。

会場·環境

運営体制

主催・企画・広報
- 京都:Re-Search実行委員会（山城部会）
- 京都府（文化芸術課／山城広域振興局企画・連携推進課）
- 京田辺市（文化・スポーツ振興課）
- 木津川市（学研企画課）
- 精華町（企画調整課）
- 株式会社けいはんな

出演者



(c)Rina Nakano

音楽ファシリテーター

片岡祐介

かたおか・ゆうすけ

打楽器奏者・即興演奏家。1969年生まれ。子どもの頃から作曲や即興演奏に興味を持ち、木琴やピアノの演奏を自己流で始める。映画やCMなどの音楽制作に関わったり、ダンスや演劇とのコラボレーションを多数おこなう。現在はYouTubeのライブ配信機能を使って、観客とやり取りしながら演奏するコンサートを開催したり、クラシック音楽を解説しながら演奏するコンサートや、即興演奏や歌づくりなどのワークショップもおこなっている。 著書に、CDブック『即興演奏ってどうやるの』（共著 あおぞら音楽社）がある。



演奏

けいはんなフィルハーモニー管弦楽団

関西文化学術研究都市を活動の拠点とする、クラシック音楽の本格的オーケストラ。1995年に発足し、けいはんな地域を中心としたエリアで活躍するメンバーで構成される。日本を代表する最先端の研究所が集う学研都市を拠点とするオーケストラらしく、常に新しいことに挑戦し、世界に通じ合う楽団づくりを目指す。2025年には発足30周年を迎え、地域に愛されるオーケストラとして、ますます精力的な活動を計画している。

サブプログラム 企画・運営協力

NASC なすく

奈良先端科学技術大学院大学 認定課外活動団体。奈良先端科学技術大学院大学の大学院生たちの知識や経験を生かし、「サイエンス塾」や「星空教室」などの科学教育イベントを通じて、子どもたちに科学の楽しさを伝える取組を行っている。

けいはんなジュニアロボットクラブ

「科学のまちの子どもたち」プロジェクト（精華町）のサポート団体として設立され、プログラミングやロボット製作の体験型ワークショップなどを定期的に開催。経験豊富なエンジニアがスタッフとなり、楽しみながらテクノロジーを学ぶ場を提供している。

サブプログラム

音のアスレチック広場～音で遊ぼう！見て・感じて、“音”のフシギ～

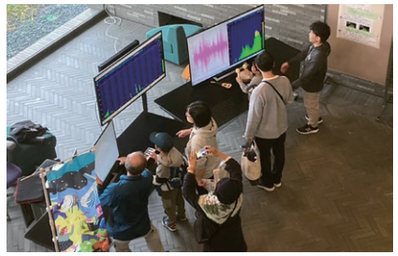
関西光量子科学研究所（QST）の施設公開日に、サイエンスの視点で“音”の不思議に触れる「音のアスレチック広場」を開催。〈音を見る〉、〈音でカタチを作る〉などの体験コーナーと、即興演奏家・片岡祐介氏による参加型ミニパフォーマンスを実施しました。

日時 ｜ 2024年11月16日（土）10:00～16:00
会場 ｜ 関西光量子科学研究所（QST）
参加・対象 ｜ 無料・年齢制限なし
来場者数 ｜ 計927名
出演 ｜ 片岡祐介
企画運営 ｜ NASC
けいはんなジュニアロボットクラブ

① 音のフシギ体験コーナー

▶ 音を見てみよう！

来場者がマイクや鍵盤を使って鳴らした音を、波形に変換するプログラムを使ってディスプレイで可視化。一音の中に様々な高さ（周波数）の音が含まれることなど、説明を聞きながら体験してもらいました。自分や家族の声を見比べたりするのはもちろんのこと、「歌手の声や楽器の音ではどんな波形が見られるか?」、「音の分析が活かされている研究分野は?」などの質問も寄せられ、多くの来場者の興味関心を引き出していました。



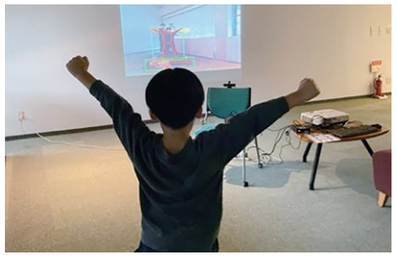


▶ 音でカタチを作ってみよう！

音は空気中を伝わる振動であることを体験するコーナー。ビニールの上に撒かれた塩に向かって声を発すると、声の振動で塩が動いて模様ができ、大きな声を出して楽しむ子どもたちや、声量や声色によって塩の形が様々に変化するのを楽しむ家族の姿が見られました。その他、一定の周波数の音をスピーカーで鳴らして模様を作るクラドニ図形や、オシロスコープ、ファンクションジェネレーターといった高度な機器も用意して、より応用的な展開につなげる工夫もあり、子どもから大人まで関心を寄せていました。









▶ 音を出すために動いてみよう！

「身体の動きと連動して音を鳴らせないか?」という発想からスタートしたのが、身体の動きを認識し、感知した動作に合わせて音を鳴らす体験コーナー。腕を上にあげる、腕を振り下ろす、回転させるなど、音が鳴る動作を一通り紹介した後、来場者が自由に動き回って能動的に音を鳴らす体験を提供しました。AIによる姿勢推定というイメージが湧きにくい先端技術を、多くの来場者が音を通じて直感的に理解し、親しむ機会となりました。





出演 ｜ 片岡祐介（即興演奏）
時間 ｜ 1回目11:00～11:30
2回目14:00～14:30
参加 ｜ 無料・会場で整理券を配布
参加人数 ｜ 計42名

② 参加型ミニパフォーマンス『音ってなあに?』

即興演奏家の片岡祐介氏が、来場者とともに「音のヒミツを探る」ミニパフォーマンスを行いました。
まずは、片岡氏が自身の体や椅子などを使って即興演奏を披露。何もない空間でも音を創り出せることを示した後、来場者も手や身体を叩くなどで音を鳴らしました。
その後、来場者が椅子やゴミ箱、壁などを叩いたり擦ったりして、会場の会議室内にある様々な素材の中から好きな音を探します。
最後に、来場者が見つけた好きな音で奏でられた即興演奏を、順に繋いでいくパフォーマンスを実施。他の人の音に耳を澄ましつつ、片岡氏の誘導で次から次へと音が連なり、最後に全員で音を鳴らしたところで、片岡氏が鍵盤ハーモニカでメロディーを加えて“会議室オーケストラ”が完成しました。自分たちが生み出した即興演奏に、驚きと笑顔が溢れていました。

メインプログラム

アスレチック型コンサート
～オーケストラと遊ぼう！～

日時 ｜ 2025年1月11日（土）14:00開演／13:00～受付
会場 ｜ 京都府立けいはんなホール　メインホール
対象 ｜ 小学生～大人
参加 ｜ 無料・申込制
来場者数 ｜ 計648名（定員900名）
出演 ｜ 片岡祐介（音楽ファシリテーター）／
けいはんなフィルハーモニー管弦楽団（演奏）／
冨田健一（指揮）



全身で音を感じるアスレチック型コンサートの様子。

プログラム（曲目）

- **どこから聴こえてくる?**
  ～《かえるの合唱》本気version　片岡祐介編曲
- **雷鳴と電光**　J.シュトラウス２世
- **ワルツィング・キャット**　L.アンダーソン
- **オーケストラの楽器紹介メドレー**　片岡祐介編曲
- **カルメン前奏曲**　G.ビゼー
- **セレナータ**　L.アンダーソン
- **ハンガリー舞曲第６番**　J.ブラームス
- **エルザの大聖堂への行列**
  歌劇《ローエングリン》より　R.ワーグナー



客席のあちこちから音が聴こえてくる
《かえるの合唱～本気version》。



《ワルツィング・キャット》では客席から
可愛い猫たちの鳴き声が。



それぞれの個性が光る指揮者体験。



指揮者体験を見守る大人たちの眼差しも温かい。



演奏者のすぐ近くで音を身体で感じてみる。



音楽ホールでオーケストラの演奏を楽しむ来場者たち。

✎参加者・来場者の声

サブプログラム

▶ 人生で全く触れてこなかった分野でとても刺激になりました。（奈良県・30代）

▶ ワークショップで、身近な物で色々な音が鳴り、もっと鳴らしたいと思いました。（精華町・～10代）

▶ 子どもが音をカチカチ鳴らすといつも怒っていましたが、ワークショップで自分が体験すると面白く、こういうのが面白くてやっているのかと理解できました。（滋賀県・50代）

▶ 息子が音楽の習い事をしているので参加しました。色々な音の楽しみ方があり、今後の音楽活動に活かしてくれたらと思います。（京田辺市・40代）

メインプログラム

▶ 音を感じる…じわーっと入ってくるのが本当に分かり感動しました！（京田辺市・40代）

▶ コンサートのタイトル通りアスレチックを登っているみたいに感じた。（京田辺市・～10代）

▶ 音楽はそんなに好きじゃなかったけど、このコンサートに来てもっと音楽を好きになりました。（精華町・～10代）

▶ クラシックなのに親しみやすく、涙が出るくらい笑うこともあり、こんなに楽しいコンサートは初めてでした。（奈良県・40代）

▶ 後ろの席でも音はちゃんと聴こえていたけど、前に行ったらもっと音が大きくてびっくりした。（木津川市・～10代）

コンサートレポート・講評

西田陽子

昨年度、当館・文化パルク城陽で実施した初のアスレチック型コンサートは企画段階から綿密に進められ、担当者の熱い思いが直球で伝わって来るものであった。何より、その段階で作り手が楽しんでいたのだ。今回もどれだけの時間と人の力が注がれたことだろう。この観客で埋め尽くされた会場を見て、もうすぐ始まるコンサートへの期待が湧きあがった。

前回同様に片岡氏と奏者２名が舞台せりに腰掛けるスタイルで演奏が始まる《かえるの合唱～本気version》。徐々にあちこちから音が聴こえてくる、意表を突いた始まりに、子ども達の顔が輝きはじめる様がまぶしい。

次世代へ文化を継承していく、という面で、クラシックを含めた伝統文化の良さを伝えること、人を集めることは時間と労力が必要な課題。芸術文化がもたらす影響は誰もが知るところであり必要不可欠なものであることは間違いない、にも関わらず実際、あらゆることが多様化されている今、芸術文化はまさに嗜好品であり選び放題、しかもマストなものではないと考える人も少なくない。

アスレチック型コンサートは「既存のクラシックコンサートの枠からはみ出すことも必要である」と知らしめてくれる。参加した人々が音楽の楽しさを経験し、その楽しかった記憶が残る。そして次の扉を開けることによりどんどん広がっていく世界を体験できる。クラシック公演の聴き方、運営の仕方、今ある「常識」を覆すほどの新しい風が吹くかどうか、疑問はあるが、自らチケットを買ってホールに足を運ぶ、という行為が非日常を楽しむ日常となり、音楽は楽しい、ということを経験する過程を経て、文化を継承しながら新しさを生み出すことは可能なのではないか、と感じた。

最後の曲、ワーグナーの《ローエングリン》で、片岡氏が「音楽を聴いてジワーっとなったことありますか?」と問いかける。そう、その感覚！身体の力を抜いて、ポカーンと口を開けてリラックスして耳を傾ける、ということ。「ジワーっと来る」その感覚は一生忘れられない大切な出会いとなる。

舞台にはスポットライトがあたり、演者は自信に満ちて輝きを放つ。同様に素晴らしい音楽に出会ったとき、来場者も輝きを放つ。その瞬間こそがコンサートの素晴らしさである。アスレチック型コンサートはその名の通り舞台と客席が作り上げるコンサートの形を具現化したもの。戸惑うことなくアグレッシブに参加した観客の満ち足りた表情が成功を物語っていた。

西田陽子　にしだ・ようこ

公益財団法人城陽市民余暇活動センター文化事業部主査。３歳から始めたピアノとの出会いにより、音楽が生活の一部となる。民間企業を経て、2004年から現職場に勤務。地域密着にこだわり『つないdeつむぐプロジェクト』を立ち上げ、市民参加型事業をはじめ、文化パルク城陽の各種事業の企画・運営と地域の文化振興に携わっている。

アウトリーチ

次世代向け派遣事業

京都府では、子どもを対象とした文化芸術体験機会を提供する取組として、教育機関等への派遣型アウトリーチを実施しています。

2024年度は、幅広いジャンルの専門家を派遣する「学校・アート・出会いプロジェクト」に加え、京都の人々の暮らしに根差し、生活の中に息づいてきた「茶の湯」や「いけばな」を次世代の子どもたちが体験する取組を新たに開始しました。

次世代向け派遣事業

学校・アート・出会いプロジェクト

京都府内の児童生徒及び教員に対し、質の高い文化・芸術を体感する機会を提供することにより、児童生徒の豊かな心を育成するとともに、京都の文化芸術の振興と次世代への継承を図ることを目的とし、文化芸術体験事業に携わる専門家・実演家等を派遣しました。

対象 ｜ 京都府内（京都市立を除く）の
小中学校・府立特別支援学校・府立高等学校
※高等学校は「地域の伝統文化継承プログラム」のみ対象
期間 ｜ 2024年6月24日（月）～2025年3月18日（火）
実施校数 ｜ 小学校39校、中学校11校、府立特別支援学校９校、
府立高等学校５校
実施件数 ｜ 計90件
参加者数 ｜ 計9,265名（見込み）

派遣講師 ｜ 文化芸術団体及びクリエイター、実演家 等

2024年度の開講ジャンル一覧

古典芸能 ｜ 落語・邦楽・能楽・狂言・囃子・日本舞踊
伝統工芸 ｜ 草木染・ロウケツ染・竹工芸・陶芸
伝統文化 ｜ 香道・着物・書道
美　　術 ｜ 絵画・造形・ステンドグラス
音　　楽 ｜ 音楽基礎・合唱・歌劇（オペラ）・わらべ唄・
楽器（和太鼓、オカリナ、二胡、アフリカンドラム）
ダンス・演劇 ｜ ダンス・パントマイム・演劇・バレエ
劇　　｜ 人形劇・影絵芝居
そ の 他 ｜ 映像・建築・道具（民具）

体験プログラム

１回のプログラムから、複数回にわたる体験授業まで、授業時間内で実施します。内容は、担当教員と講師やコーディネーターが相談し、子どもたちの状況や実施目的に応じて決定します。

対象 ｜ 小学校・中学校・特別支援学校
実施件数（校数）｜ 小学校37件（24校）、
中学校12件（９校）、
特別支援学校17件（９校）

合同鑑賞プログラム

地域の文化施設やホールで行うプログラムです。近隣の学校が一緒に、能や舞台芸術などの合同鑑賞会を実施します。

対象 ｜ 小学校・中学校・特別支援学校
実施件数（校数）｜ 小学校８件（８校）

地域とともに文化探求・発信プログラム

地域に根づいた文化を調査・体験し、発表をするまでを計画的に実践するプログラムです。

対象 ｜ 小学校・中学校・特別支援学校
実施件数（校数）｜ 小学校６件（６校）、中学校１件（１校）

地域の伝統文化継承プログラム

祭りや郷土食など、地域の伝統文化を受け継ぐことを目的に、地元の保存会などと協力し、複数回継続した活動を行うプログラムです。

対象 ｜ 小学校・中学校・特別支援学校・高等学校
実施件数（校数）｜ 小学校２件（２校）、
中学校１件（１校）、
高等学校５件（５校）

教員向けプログラム

教員を対象にワークショップを行うプログラムです。教科単位の研修や校内研修などで、教材開発や指導に活用をしてもらうことを目的に実施します。

対象 ｜ 教員（小学校・中学校・特別支援学校・高等学校）
実施件数（校数）｜ 1件（1団体）

Pickup ｜ 事例紹介

古典芸能 ｜ 日本舞踊の鑑賞と体験

宇治市立西大久保小学校 × 春乃櫻香舞踊研究会

４年生53名が日本舞踊を体験しました。日本舞踊の歴史講座、講師らによる日本舞踊を鑑賞した後、始めと終わりのお辞儀の作法や、扇の使い方、立姿勢の所作を学びました。中には「次の日に筋肉痛になるくらいがんばれた」という児童も。また、体験後には事後学習として地域に伝わる踊りや舞の音楽を調べ、地域学習にも繋がったようです。



わらべ唄 ｜ 声とリズムで遊ぼう

亀岡市立つつじケ丘小学校 × 藤本容子（鼓童）
派遣団体 ：(公財) 京都府中丹文化事業団

３年生105名がわらべ唄に取り組みました。講師の藤本氏の人柄や声に触れ、表情が硬かった児童も楽しそうに合唱とリズム体験に参加する姿がみられました。また、「音楽が苦手だけど、藤本先生と音楽をすると“すごく楽しい！”という気持ちがあふれてきた」という感想もあり、音楽体験や音楽への印象が更新される機会となりました。



狂言 ｜ 狂言を知ってみよう

井手町立井手小学校 ×（公社）能楽協会京都支部

６年生36名が国語科で学習をした狂言《柿山伏》の鑑賞と狂言ワークショップを体験。狂言師による解説・実演という本物に触れる機会に。また、体験では基本の構えや笑い方、《柿山伏》に出てきた所作を習うことで、現代の言葉遣いとの違いや、室町時代の言葉の響きやリズムに親しみ、実体験だからこそ得られる気づきの機会にもなりました。





書道 ｜ でっかい文字で「校歌」を書こう

京田辺市立薪小学校 × 上田普

１～６年生18名が２日間の書道体験に取り組みました。書道の歴史や漢字の成り立ち等を学び、1日目に自分の好きな言葉を書いた扇制作、2日目に大きな筆で、歌詞を意識しながら校歌の巨大な書画を制作しました。体験を通して子どもたちは、書道が字を正しく書くことだけでなく、自由な表現に挑戦することの楽しさも併せ持つ技法であることを体感したようです。



陶芸 ｜ 楽茶碗を作って、日本のお茶の文化を知ろう

京丹波町立蒲生野中学校×（有）松楽（昭楽窯）

１～３年生17名が楽茶碗づくりに挑戦。生活文化である茶道の歴史を学び、手捏ねでの制作に取り組みました。生徒たちは体験を通じ、手捏ねだからこそ生まれる手に馴染む形やズレが、お茶を美味しいと感じる要素や工夫であることも知り、茶碗に込められた“もてなしの「こころ」”を体感する機会となりました。



地域とともに文化探求・発信プログラム ｜ 能楽

南丹市立殿田小学校 × 井上貴美子
派遣団体 ：(公財) 梅若会

丹波猿楽の名家・梅若家ゆかりの地・日吉町世木地域にある殿田小学校では、能楽の文化探求・発信プログラムが３年目を迎えました。児童たちは、３年生８名が中心となり能と校区の繋がりを探るフィールドワークと、梅若会に所属する能楽師・井上貴美子氏や囃子方の指導のもと能楽体験に取り組みました。地域住民を招いた成果発表会では、能の発表だけでなく、子どもたち監修の能楽クイズコーナーもあり、地域文化振興の寄与にも繋がりました。

✎担当教員の声

子どもたちの普段とは違う一面を見ることができましたか？

▶ 制作活動が苦手な児童も生き生きと活動をしていた。（小学校・陶芸体験）

▶ 初めて触れる文化に、意欲的に恥ずかしがらずに取り組んでいた。（小学校・狂言体験）

▶ 普段関わらない児童同士が関わって楽しんでいたから。（小学校・造形体験）

▶ 午後の授業は覚醒が低くなりがちな生徒もしっかりと覚醒して授業を受けていたことから、興味関心を持っている様子が伺えた。（特別支援学校・香道体験）

専門家の指導に触れることによって、指導方法の気づきや改善に繋がりましたか？

▶ 高学年でも実際に手本を見せることの大切さを改めて感じました。（小学校・狂言体験）

▶ 子どもたちの驚きを引き出しながら指導をしてくださった。（小学校・竹工芸体験）

▶ 小学校教員は、学習の中で児童が失敗しないように手立てを打つことが多いのですが、「失敗から学び、次の行動を考えさせる」という講師の先生の指導は参考になりました。（小学校・造形体験）

▶ 子どもの力を信じ、状況に応じて指導をしていくことの大切さ。（小学校・ダンス体験）

▶ 伝統の継承のために、何を大切にされているのか、直接話を聞かせていただくことで、私たち教員からでは伝えることが難しい作り手の願いや思いについて知ることができました。（小学校・陶芸体験）

そのほか、実施の際に気がついたことやご感想、ご要望などがあればご記入ください。

▶ 伝統行事や古き良き文化に触れることが年々減っていると感じているので、この機会に体験できたことが貴重であったと感じています。（小学校・日本舞踊体験）

▶ 本事業を通して、児童が主体的に学習に取り組む姿に感動しました。特に、ワークショップで普段は発言しない児童が積極的にアイディアを出している姿を見て、本事業が児童の自己肯定感を高めることに繋がっていると感じました。また、専門家の皆様の熱意ある指導に大変感謝しております。（小学校・狂言体験）

▶ いつも生徒の新しい一面を発見することができます。また、生徒同士の交流も深まり、1つの作品をつくりあげることで、大きな達成感を得ることもできています。（中学校・和太鼓体験）

▶ 平面に描いていた絵が立体になり、ドームの中から見ると感じ方や見方が変わるという体験が大変面白かったです。児童は、絵を描くことを楽しむだけではなく、「ものの見方や考え方」についても学ぶことができたと思います。なかなかできない貴重な機会をありがとうございました。（小学校・造形体験）

▶ 児童にとって、非常に貴重な経験の場となりました。地域のアーティストの方と創作活動を通して繋がれるところもとてもよかったです。子どもたちは、家庭でも作品を見せながら、作る工程やステンドグラスの良さ、自分の作品のおすすめのところを家族にたくさん話していたようです。（小学校・ステンドグラス体験）

次世代向け派遣事業

学校・茶の湯・出会いプロジェクト

京都府内の児童生徒に対し、学び舎である学校等で、日本の生活文化である「茶の湯（茶道）」体験を実施するプロジェクトです。
茶の湯を体感する機会を提供することにより、日本の道徳観や美的感覚、生活を彩り他者をもてなすための創意工夫を学ぶことで、子どもたちの豊かな心や創造性を育むとともに、先人から受け継がれてきた文化の心を次世代に継承することを目的に実施しました。

対象 ｜ 京都府内（京都市立を除く）の小中学校・府立特別支援学校
※教育支援センター、適応指導教室等も対象
期間 ｜ 2024年6月25日（火）～ 2025年2月26日（水）に随時実施
実施校数 ｜ 小学校18校／中学校4校／特別支援学校5校／適応指導教室1教室
実施件数 ｜ 計29件
参加者数 ｜ 計998名

派遣流派 ｜ 表千家／裏千家／武者小路千家／藪内家／大日本茶道学会
派遣講師数 ｜ 主講師24名

協力 ｜ 京都府教育委員会

茶の湯体験外部コーディネーター ｜ 崎川真璃絵／佐藤和佳子／北村英之

茶の湯体験 ｜

「茶の湯」の世界へようこそ！
お茶会に参加しよう！

学校の教室等をお茶席に設え、身近でありながら特別な空間となった教室等で、子どもたちを心からもてなす「お茶会」を実施。五感を通して講師の心からのもてなしを体感することにより、茶の湯に息づく日本の生活文化の豊かさ、奥深さ、茶の湯の「こころ」について学ぶプログラムです。



教室の設え（セッティング）

茶の湯は一般的に畳の上で正座をして行いますが、座敷やカーペットでの実施が難しい学校では、椅子に座って行う「立礼式（りゅうれい）」で体験を行いました。

座礼式（例）







立礼式（例）







プログラムの基本的な流れ



① 導入（学習のねらい、講師紹介）

学校教員から学習のねらい、体験の流れ、講師等を紹介します。講師・補助講師・水屋のスタッフ紹介では、お茶会は表に立つ亭主だけでなく、裏で準備を行う人々の尽力もあり成り立つことを知り、物事の背景を捉える学びに繋げます。



② 講義

学習のねらいや学校からの要望に応じて、学校での学びに関連づけた講義を行います。

［講義例］

- ▶ お茶の伝来から千利休までの茶の湯の歴史
- ▶「和敬清寂」「一期一会」など掛け軸で用いられる禅語について（茶の湯の「こころ」）
- ▶ 茶室や道具類について



③ 実演・解説

講師等による実演と解説を交えながら、基本的なお茶会の流れや、立ち振る舞いを学びます。

［例］

- ▶ お辞儀などの礼儀作法を体験する
- ▶ 席入り、点前の実演を見て学ぶ
- ▶ お菓子、お茶のいただき方を学ぶ





④ 体験活動



②③で学んだことを踏まえ、お菓子とお茶をいただく「もてなされる体験（客人の振る舞い）」と、「もてなす体験」を行います。
また、子どもたちが自ら「お茶を点てる体験」等を組み合わせることも可能です。

［実施例］（A ～ Dを組み合わせて実施）

A 児童生徒が講師からもてなしを受ける





B 児童生徒がペアを組んで、互いにお茶を点て合い、もてなし合う





C 児童生徒が自分で点てたお茶を飲む（ご自服）



D 児童生徒が教員等をもてなす



⑤ まとめ（感想の発表・質疑応答）

講師による活動のまとめや、子どもたちからの感想・質疑応答、講師へのお礼で体験を終えます。



茶の湯体験初実施校への支援体制

（コーディネーターの派遣）

本プロジェクトでは、茶道家が児童生徒や学校設備に合わせたオリジナルの茶の湯体験プログラムを企画します。実施希望校のうち約７割が茶の湯体験を初めて実施する状況を踏まえ、打ち合わせや体験教室の設営を円滑に行えるよう、京都府から学校教員と茶道家間の調整を担うコーディネーターを派遣しました。

Pickup ｜ 事例紹介





南丹市立美山小学校（5・6年生）

講師 ｜ 杉山和子（表千家）
科目（コマ数） ｜ 道徳、家庭科（２コマ）
教室 ｜ 家庭科室（座礼＋立礼）

［実施内容］
① 導入（学習のねらい、講師紹介）
② 講義、床の間の解説、校区内で摘まれた草花を使って茶花を生ける様子を見学
③ 席入り等の実演を見学
④ お菓子の取り方・お茶のいただき方のレクチャー
⑤ お菓子と自分で点てたお茶を飲む体験
⑥ もてなす側ともてなされる側を交代で体験

もてなす側	もてなされる側
お菓子を運ぶ	→ お菓子をいただく
お茶を点てる	
お茶を運ぶ	→ お茶をいただく

⑦ まとめ、児童からの感想発表







京都府立向日が丘支援学校（高等部３年生）

講師 ｜ 中谷宗豊（裏千家）
科目（コマ数） ｜ 特別活動（２コマ）
教室 ｜ 生活訓練室（座礼＋立礼）

［実施内容］
① 導入（学習のねらい、講師紹介）
② 礼の意味や作法を学ぶ
・畳での座り方
・礼の作法
・床の間へ礼をする意味を学ぶ
③ 講師による席入り、お茶とお菓子のいただき方の実演を見学
④ お菓子と講師が点てたお茶をいただく体験
⑤ お茶を点てる体験（ご自服または友だちに点てる）
⑥ 質疑応答

南丹市立園部第二小学校（6年生）

講師 ｜ 芳野敬弥（武者小路千家）
科目（コマ数） ｜ 社会科（2コマ）
教室 ｜ 指導教室（座礼）→視聴覚室（立礼）

［実施内容］
① 導入（学習のねらい、講師紹介）
② 講義（茶の湯の歴史、「和敬清寂」について）
③ お点前鑑賞、お菓子とお茶のいただき方を学ぶ
④ お菓子と講師が点てたお茶をいただく体験
⑤ お茶を点てる体験（ご自服）
⑥ 学校教員をお菓子とお茶でもてなす体験
⑦ まとめ、質疑応答





宇治市立南小倉小学校（3年生）

講師 ｜ 小林健一（藪内家）
科目（コマ数） ｜ 総合的な学習の時間（2コマ）
教室 ｜ 通常教室→ホームルーム教室（座礼）

［実施内容］
① 導入（学習のねらい、講師紹介）
② 講義（茶の湯の歴史やお茶の栽培について）
③ 和室に移動して、席入り体験
④ 講師からの設え解説
⑤ お点前鑑賞
⑥ お菓子と講師が点てたお茶をいただく体験
⑦ 2人1組になりお茶を点て合う体験



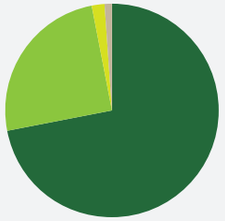


アンケート結果（児童生徒）

回答数 ｜ 811名（2025年2月13日時点）

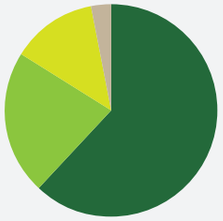
茶の湯を体験してみて、どうでしたか?

- 72%｜とてもよかった
- 25%｜よかった
- 2%｜あまりよくなかった
- 1%｜わからない



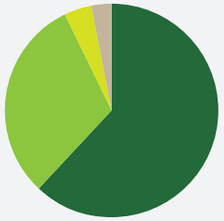
茶の湯を体験するのは、初めてですか?

- 62%｜初めて
- 22%｜学校でしたことがある
- 13%｜家でしたことがある
- 3%｜習っている



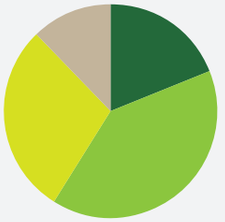
また、茶の湯を体験したいと思いますか?

- 62%｜とても思う
- 31%｜すこし思う
- 4%｜思わない
- 3%｜わからない



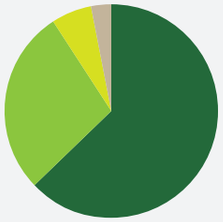
茶の湯を習ってみたいと思いますか?

- 19%｜とても思う
- 40%｜すこし思う
- 29%｜思わない
- 12%｜わからない



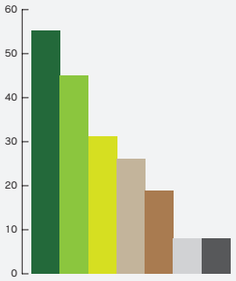
今日の体験を、家族や友だちに話したいと思いますか?

- 63%｜とても思う
- 28%｜すこし思う
- 6%｜思わない
- 3%｜わからない



茶の湯を体験してみて、どのような気持ちになりましたか?（複数選択）

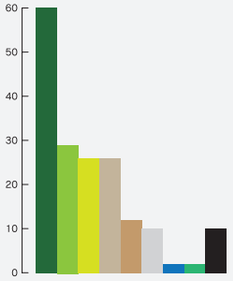
- 55%｜楽しくなった
- 45%｜ほっとした
- 31%｜緊張した
- 26%｜元気になった
- 18%｜緊張や不安が少なくなった
- 8%｜とくに感じなかった
- 8%｜そのほか



アンケート結果（教員）

回答数 | 42名（2025年2月13日時点）

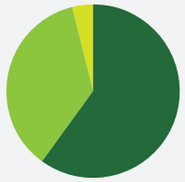
応募した理由
（複数選択）



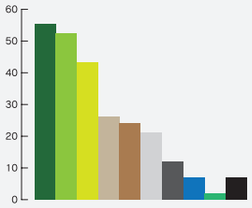
- 60% | 体験内容に興味があったから
- 29% | 授業に新しい学びの要素を取り入れたかった
- 26% | 指導計画と合っていたから
- 26% | 子どもたちが地域について知るきっかけになると思ったから
- 12% | 教員も学んでみたかったから
- 10% | 子どもたちの状況に合っているから
- 2% | 行事等の予定に余裕があったから
- 2% | 授業をアップデートしたかったから
- 10% | そのほか

子どもたちの満足度について

- 60% | 非常に高かった
- 36% | 高かった
- 4% | 普通



実施してみて、育むことができたと思う子どもたちの能力
（複数選択）



- 55% | 他者を思いやる力
- 52% | 感動する力
- 43% | 集中する力
- 26% | 共感する力
- 24% | 生命やモノを尊ぶ力
- 21% | 対話する力
- 12% | 伝える力
- 7% | 協力する力
- 2% | 発想する力
- 7% | そのほか

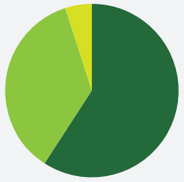
子どもたちの普段とは違う一面を見ることができましたか?

- 95% | できた
- 5% | できなかった



専門家の指導に触れることによって、指導方法の気づきや改善に繋がりましたか?

- 59% | とても思う
- 36% | まあ思う
- 5% | どちらともいえない



今回の体験を通じ、子どもたちの興味・関心を引き出すことができましたか?

- 74% | とても思う
- 24% | まあ思う
- 2% | どちらともいえない



今後の事業について

- 93% | 活用したいと思う
- 7% | 活用したいと思わない

※打ち合わせ時間の短縮等が図られるのであれば活用を検討



✎ 子どもたちの声

▶ 社会では、自分の地位などがあるけれど、茶の湯では地位に関係なく、誰でも平等に扱うという決まりが素晴らしいと思いました。また、自分のことを謙虚に思う心も印象に残りました。（小学６年生）

▶ 先生一人一人の所作が綺麗で見入ってしまいました。お茶を点てる動作や、お礼の仕方も一つ一つが洗練されていて見ているこちらも背筋が伸びました。（小学５年生）

▶ 静かになると、お湯を入れる音や、お抹茶を点てる音など、色々な音が聞こえてきて、とても落ち着きました。（小学５年生）

▶ 茶道は日本の文化全てに繋がっていると知って、すごいなと思った。（小学６年生）

▶ 妹とすぐ喧嘩になっちゃうことがあるけど話を聞いて「和敬清寂」の動じない心や、清潔さを意識して、喧嘩しないようにしようと思いました。（小学６年生）

▶「一期一会」の言葉が心に残りました。一生に一度しかないから、その時その瞬間を大切にしたいと思います。（小学６年生）

▶ プロの人は点てるのもうまいし、お茶もおいしかったです。私がお菓子を好きではなくて、横に置いていたら、優しく「無理して食べなくていいよ」と言ってくれて嬉しかったです。（小学３年生）

✎ 教員の声

▶ 伝統文化に触れるだけでなく、己をコントロールする所作や相手に心を尽くすという意味、そして実感など、児童にとって多くの学びがあったと思います。（小学校）

▶（児童たちが）穏やかになったように感じます。（小学校）

▶ 和敬清寂の「清」や「寂」ができていないなと気づいたり、友だちに「寂やで！」と声かけをして意識していた。（小学校）

▶ 礼をすることに意味を見い出したり、道具を大切にする心など、何事にも普段考えないような意味と意義があることを知り、影響を受けていた。（小学校）

▶「家でお茶を入れてあげて」と講師の方に言われたとおり、祖母にお茶を入れる児童がいた。（小学校）

▶ 茶道と今習っている歴史の学習が結びついていることを体感したようです。（小学校）

▶ 言葉が上手ではないが、クラスの雰囲気がよくなって、友だちと一緒に活動できた喜びを感じているようだった。（特別支援学校）

▶ したことのない経験から、いろんなことにチャレンジしようとすることを大切にしようと改めて話をしていた。（小学校）

▶ お菓子や抹茶の味、教えていただいた「一期一会」や「和敬清寂」について、教室で話題に上りました。礼の所作を実践する子もいました。（小学校）

京都府教育委員会からのコメント

茶の湯は、一服の茶を通じて、席を同じくする人々が心を開いて繋がり合うことができる取組です。感想からは、礼儀作法や所作のみならず、それらの背景にある、もてなす側ともてなされる側が互いの心を和らげてつつしみ敬う心などへの理解を深めた様子がうかがえます。今回の取組が、子どもたちが伝統文化への関心を高め、人を思いやる心、豊かな感性を育む一助になれば幸いです。

次世代向け派遣事業

学校・いけばな・出会いプロジェクト

京都府内の児童生徒に対し、学び舎である学校等で、日本の生活文化である「いけばな（華道）」体験を実施するプロジェクトです。
いけばなの歴史・文化を学びながら、瑞々しい花々を生ける機会を提供し、日本の道徳観や美的感覚、生活を彩り他者をもてなすための創意工夫を学ぶことで、子どもたちの豊かな心や創造性を育むとともに、先人から受け継がれてきた文化の心を次世代に継承することを目的に実施しました。

対象 ｜ 京都府内（京都市立を除く）の小中学校・府立特別支援学校
※教育支援センター、適応指導教室等も対象
期間 ｜ 2024年9月24日（火）～ 2025年1月31日（金）に随時実施
実施校数 ｜ 小学校３校／中学校５校／特別支援学校６校
実施件数 ｜ 計20件
参加者数 ｜ 計724名

協力 ｜ 京都府教育委員会／京都いけばな協会／京都生花株式会社

いけばな体験 ｜

楽しく花を生けてみよう



生きている花を用いて、生活を彩ることができる「いけばな」体験を実施。瑞々しい花々や草木に触れることにより、生命の尊さや力強さを感じるとともに、同じ花を使用しても一人一人違った味わいのある作品ができあがり、子どもたちそれぞれの個性を感じられます。また、体験後には、自宅でも生けてもらい、生活の中でいけばなを体感できます。

事前準備



① 実施教室の選定
いけばな体験は花材を広げるスペースが必要なため、広い作業台や机のある美術室等で実施します。また、花器に水を張るため、室内に水道がある教室、または近くに水場のある教室を推奨しています。

② 花材と道具類の保管
花材・道具類の手配は京都府が行い、実施前後の保管を学校が担います。

［花材の保管について］
実施前後に花を保管するため、水を張ったバケツを用意しておきます。





［使用する主な道具類］
花器 ｜ 直径25cm
※学校の希望に応じて、学校が用意した器を使用することも可能。
花ばさみ ｜ 16.5cm
剣山 ｜ 直径10cm
オアシス ｜ 給水性に優れたスポンジで、自宅でお花を生ける際の花留めとして利用





▼ プログラムの基本的な流れ

① 導入（学習のねらい、講師紹介）

学校教員から学習のねらい、体験の流れの説明、講師の紹介を行います。
また、体験で使用した花は持ち帰り、再び自宅でも生けることを伝えます。



② 講義

日本の伝統文化として育まれてきたいけばなの歴史や背景、自然とのかかわり方、華道で大切にされている「こころ」を学びます。

- ▶ 伝統文化としての華道とその歴史
- ▶ 草花の生命（草花を大切にする「こころ」）
- ▶ 使用する花の特徴や扱い方
- ▶ 節句、生活の中での草花　等



③ 実演・解説

体験に使用する草花、道具類の名前と使用法、作業中の注意点を説明します。
講師の解説を交えた実演では、草花の切り方や生け方を学びます。









④ 体験活動

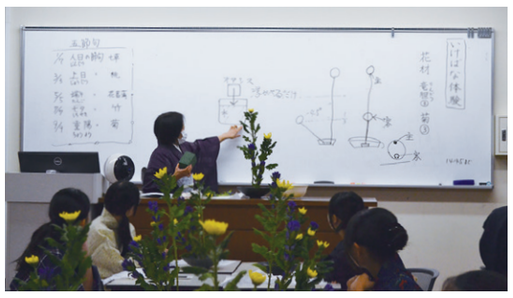
講師の指導のもとで、花を生けていきます。型は決まっていますが、一つ一つ違う草花、生ける場所や角度などで、子どもたちそれぞれの個性が際立つ作品ができあがります。





⑤ 作品撮影・鑑賞

作品ができた人から、学校教員が作品の撮影を行います。一度剣山から抜いてしまうと二度と同じものを生けることはできないので、記録として写真に残します。撮影した作品写真は体験後に自宅で生ける際にも活用できます。
また、全員の撮影には時間を要するため、撮影の待ち時間にほかの人の作品を鑑賞し、異なる感性を学びます。



⑥ 自宅での生け方の説明

自宅でもいけばなを続けられるよう、作品で使った花を持ち帰ります。また、講師から花留めとして使用するオアシスの使い方、命ある花を最後まで大切にする「こころ」を伝えます。





⑦ 片付け・まとめ

全員で教室清掃、花を持ち帰る準備をします。最後に、講師からのまとめや、子どもたちからの感想・質疑応答、講師へのお礼で体験を終えます。

※花器に張った水には、葉や枝等が浮いており、水道管がつまる可能性があるため、ザルを使って水を捨てます。

Pickup ｜ 事例紹介

宇治市立宇治中学校
（1・2年生・特別支援学級・技術部）

講師 ｜ 西阪保則（専慶流）
科目（コマ数）｜ 総合的な学習の時間（2コマ）
教室 ｜ 多目的教室・技術室

［使用花材（1年生）］ 石化エニシダ／ドラセナ（赤）／スプレーカーネーション（ピンク）／アンスリューム



京都府立丹波支援学校（高等部1～3年生）

講師名｜杉崎翠山（喜堂未生流）
科目（コマ数）｜総合的な探究の時間（2コマ）
教室｜寄宿舎食堂

［使用花材］ サンゴミズキ／ガーベラ（ピンク）／カーネーション（オレンジ）／スイートピー（黄）／ユーカリ



舞鶴市立加佐中学校（1～3年生）

講師名 ｜ 中村凜翠（小松流）
科目（コマ数）｜ 総合的な学習の時間（2コマ）
教室 ｜ 美術室

［使用花材］ サンゴミズキ／ガーベラ（オレンジ）／スプレー菊（白）／丸葉ルスカス



京都府立与謝の海支援学校（高等部1～3年生）

講師名 ｜ 桑原健一郎（桑原専慶流）
科目 ｜ 自立活動（サークル活動）
教室 ｜ 工芸室

［使用花材］ ユキヤナギ／スプレー菊（白）／一輪菊（黄）／糸菊（紫）

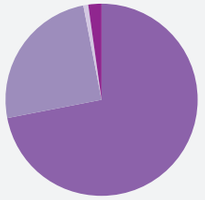


アンケート結果（児童生徒）

回答数 ｜ 591名（2025年2月13日時点）

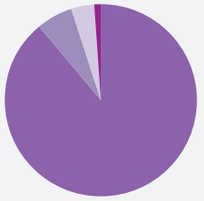
いけばなを体験してみて、どうでしたか？

- 72％｜とてもよかった
- 25％｜よかった
- 1％｜あまりよくなかった
- 2％｜わからない



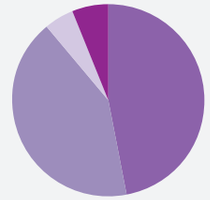
いけばなを体験するのは、初めてですか？

- 89％｜初めて
- 6％｜家でしたことがある
- 4％｜学校でしたことがある
- 1％｜習っている



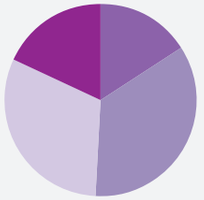
また、いけばなを体験したいと思いますか？

- 47％｜とても思う
- 42％｜すこし思う
- 5％｜思わない
- 6％｜わからない



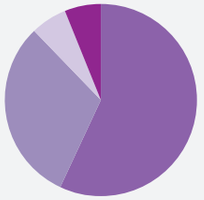
いけばなを習ってみたいと思いますか？

- 16％｜とても思う
- 35％｜すこし思う
- 31％｜思わない
- 18％｜わからない



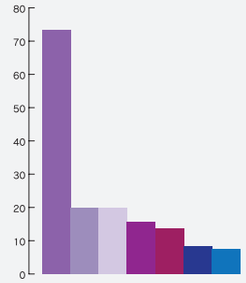
今日の体験を、家族や友だちに話したいと思いますか？

- 57％｜とても思う
- 31％｜すこし思う
- 6％｜思わない
- 6％｜わからない



いけばなを体験してみて、どのような気持ちになりましたか？（複数選択）

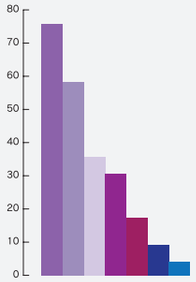
- 73％｜楽しくなった
- 19％｜元気になった
- 19％｜緊張した
- 15％｜ほっとした
- 13％｜緊張や不安が少なくなった
- 8％｜とくに感じなかった
- 7％｜そのほか



アンケート結果（教員）

回答数 | 23名（2025年2月13日時点）

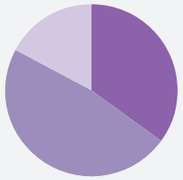
応募した理由
（複数選択）



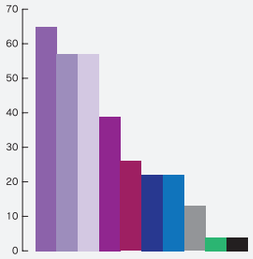
- 74% | 授業に新しい学びの要素を取り入れたかった
- 57% | 体験内容に興味があったから
- 35% | 子どもたちの状況に合っているから
- 30% | 教員も学んでみたかったから
- 17% | 指導計画と合っていたから
- 9% | 授業をアップデートしたかったから
- 4% | 子どもたちが地域について知るきっかけになると思ったから

子どもたちの満足度について

- 35% | 非常に高かった
- 48% | 高かった
- 17% | 普通



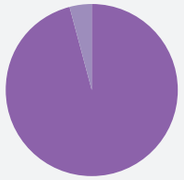
実施してみて、育むことができたと思う子どもたちの能力
（複数選択）



- 65% | 発想する力
- 57% | 集中する力
- 57% | 生命やモノを尊ぶ力
- 39% | 感動する力
- 26% | 共感する力
- 22% | 協力する力
- 22% | 対話する力
- 13% | 伝える力
- 4% | 他者を思いやる力
- 4% | そのほか

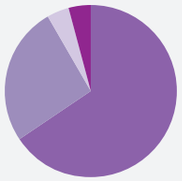
子どもたちの普段とは違う一面を見ることができましたか?

- 96% | できた
- 4% | できなかった



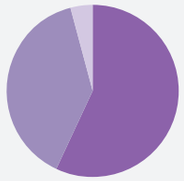
専門家の指導に触れることによって、指導方法の気づきや改善に繋がりましたか?

- 65% | とても思う
- 26% | まあ思う
- 5% | どちらともいえない
- 4% | あまり思わない



今回の体験を通じ、子どもたちの興味・関心を引き出すことができましたか?

- 57% | とても思う
- 39% | まあ思う
- 4% | あまり思わない



今後の事業について

- 100% | 活用したいと思う



✎ 子どもたちの声

▶ 西洋では左右対称を好むのに反し、日本では左右非対称が好まれるというお話を聞いた際、「左右対称の方が整って見えるはず」と思っていたのですが、今回のいけばな体験で、左右非対称の美しさや整った様子、工夫がとても感じられて、自分でも驚きました。（中学２年生）

▶ いけばなをすると、嫌なことなどを忘れられたし、めっちゃ集中して楽しくなりました。（中学２年生）

▶ 花に触れて、綺麗に生けることの楽しさがとても分かりました。いけばなを見ると、心が安らいだり、自然と気持ちが明るくなるように感じました。家に帰って早速生けました。私は日本の伝統的な文化が好きなのでまた機会があったら体験したいです。（中学２年生）

▶ 前に倒すとおかしいと感じていたけど、少し向きを変えて前に倒すと全然雰囲気が違うと知りました。いけばなは、人それぞれ形が違う作品ができ、その人のまた一つの才能が現れているのかなと思いました。（中学２年生）

▶ 同じ花を生けても一人一人少しずつ印象が違うのが面白かった。花を見ているとなんとなく心が落ち着く気がして、いけばなを体験できてよかった。素敵な体験をさせてくれてありがとうございました。（中学３年生）

▶ 最初は花のことが好きではなかったけど、心にささってびっくりした。教えてもらって花っていいなと思いました。とても嬉しくて、今度はお母さんと一緒にいけばなにチャレンジしてみようと思いました。本当にありがとうございました。（特別支援学校・高等部生）

✎ 教員の声

▶ 私自身初めての経験でとても素晴らしい時間を過ごせました。生徒にとっても日本文化と和の「こころ」の探究を進めていくにあたって貴重な時間だったと思います。本当にありがとうございました。（中学校）

▶ 体験後に季節によって花の種類が変わることの話や、剣山をお家で購入しようかと、悩んでいる話などをしていた。（中学校）

▶ いけばなに興味を持ち、またやりたいと言う生徒が大勢いた。（特別支援学校）

▶ 積極的に取り組むようになったと感じている。（特別支援学校）

▶ 学校祭で展示し、美術の授業で鑑賞をしました。花の世話ができたことや人に見てもらえたことの満足感があったように思います。（特別支援学校）

▶ 子どもたちがすることに対して肯定的にほめていただき、自由に生けることができました。ありがとうございました。（小学校）

▶ 子どもたちにとっても、教員にとっても大変学びの多い事業でよかったです。「本物」に触れることによる児童の学びの深まりを改めて感じることができました。（小学校）

京都府教育委員会からのコメント

今回のいけばな体験では、子どもたちが、花の持つ個性を最大限に活かし、自らの思いや感性を主体的に表現する姿が見られました。感想からは、花の美しさ・力強さや命の重みを感じることで、自然を愛する心や美的感覚が養われた様子が伺えます。今回の取組が、子どもたちが伝統文化への関心を高め、豊かな感性と創造力・表現力を育む一助になれば幸いです。

おわりに ｜ 謝辞

今年度も、地域の皆様や、講師・参加アーティストとしてご参加いただきました文化芸術関係者の皆様、各取組を支えてくださった皆様からのご尽力を賜り、無事に事業を終えることができました。

地域プログラムでは、アートの視点から地域の魅力を再発見する４つの事業を展開しました。また、次世代向け派遣事業では139件のアウトリーチを実施し、子どもたちへの様々な文化芸術分野の体験・鑑賞機会の創出、日本の精神性や知恵、感性の集積である「こころ」に触れる茶道と華道の体験機会の拡充にも取り組みました。

事業を終え、アンケートの結果を振り返ると、他者の視点や未知の体験を前向きに受け入れ、自己を更新していく人々の姿が垣間見えます。そのような在り方は、多様な人々が集まる「社会」や「地域」の中であっても、環境の変化に適応できる有機的な人と人との繋がりを生むきっかけになっているのではないかと感じます。

そして、こういった他者の価値や視点を自身の中に招き入れる参加者や来場者の姿は、本事業に賛同くださった関係者の皆様の確かな技術だけでなく、他者を思い、気遣う、温かなこころや眼差しから成り立っていることにも気づかされます。多大なるご支援、ご協力、ご関心を賜り厚く御礼申し上げます。

これからも、地域の人々が芸術や文化に触れることで、新しい気づきを得る文化芸術振興に繋がるよう、KYOTOHOOPでの情報発信や企画事業に取り組んでまいります。また、そうした取組を通じて、一人一人が心豊かに未来を思い描ける「あたたかい京都づくり」に努めてまいります。引き続きのご協力、ご関心をお寄せいただければ幸いです。

発行日 ｜ 2025年３月発行
発行 ｜ 京都:Re-Search実行委員会（京都府ほか）
編集 ｜ 京都府文化生活部文化芸術課
表紙 ｜ KYOTOHOOPロゴ（三重野龍）
冊子デザイン ｜ 岸本昌也
印刷・製本 ｜ 株式会社グラフィック

発行｜京都：Re-Sea rch実行委員会（京都府ほか）

令和６年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業

文化庁